

うえ の い せき かな い ばら が よう し

上野遺跡・金井原瓦窯址

座光寺配水池建設に先立つ

埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

うえ の い せき かな い ばら が よう し
上野遺跡・金井原瓦窯址

1996年3月
長野県飯田市教育委員会

序

座光寺地区も近年開発が進んでいますが、上郷町が飯田市と合併したことにより益々開発のスピードが加速すると思われます。

そこで、市では下水道付設の計画を立て近年中に実施の運びとなりました。その為に上水道の整備も必要で、当金井原地籍に配水池を建設する計画が立てられました。

金井原地籍には、飯田下伊那地域で確認されている布目瓦を焼いた窯2基の内1基が有ります。昭和28年に調査されていますが、今回完全に壊されるため再調査と配水池の敷地内の調査がされることになりました。

上水道の配水池建設という、生活に関わる事でやむを得ない事ですが、飯田下伊那に2基のうちの1基が無くなるのは非常に残念と言わなければなりません。

消滅してしまう埋蔵文化財を、後世に伝えるために調査をし報告書を作るわけですが、埋蔵文化財はそのままで残して行くのが一番だと思います。

今回の発掘調査で、窯跡だけでなく瓦を作ったらしい場所の発見もあり、成果は大きかったと思います。埋蔵文化財は平らな場所にあるものと思っていましたが、この場所は傾斜地でその地形にあった文化財があるものと認識を新たにし、重要な遺跡は地形には関係が無いことが理解できました。当調査結果は、本文中に記したようで、今後この瓦を葺いた大きな建物の発見がなされることであります。

最後になりましたが、調査及び報告書作成にあたり、理解とご協力をいただいた飯田市水道局に、そして調査に従事された方々、並びに関係者各位に衷心より感謝。お礼申し上げます。

平成8年3月

飯田市教育長

小林 恭之助

例

言

1. 本書は、飯田市座光寺上野に建設される上水道配水池建設に伴う、埋蔵文化財包蔵地上野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市水道局の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 遺跡名「上野遺跡」に略号「UNO」、金井原瓦窯址1に略号「KNG-1」を与え現地作業から実測図面・遺物等にすべてこの略号を用い記録保存した。
4. 調査地点の遺構番号は1番から付してある。
5. 本書に掲載した図面・遺物の実測は佐々木が行なった。なお、整理作業実施にあたり整理作業員が補佐した。
6. 本書は佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行なった。
7. 土層図・断面図の水平線に付した数字は、標高をmで表わしたものである。
8. 土器実測図で、断面白抜きは土師器・塗りつぶしたものは須恵器・陶器であり、また石器実測図の外側で実線は使用痕と擦痕、破線は敲打痕を表わす。
9. 基準点の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づき、株ジャステックに委託実施した。調査地点の番号は、LC-84.1-4である。
10. 本調査に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	
例　　言	
目　　次	
I 経　　過	
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	1
II 遺跡の環境	
1. 自然環境	7
2. 歴史環境	7
III 調査結果	
1. 土層堆積状態	11
2. 遺　　構	
1. 奈良時代	
1) 瓦窯址 1	11
2) 工房址 1	13
3) 工房址 2	16
2. 時期不明	
1) 土坑 1	17
3. 遺構外出土遺物	
1) 弥生時代	17
2) 奈良時代	17
3) 中世	17
4) 時期不明	18
IV 昭和28年の調査	19
V 周辺における瓦出土地	
1. 如来寺境内	29
2. 古瀬平遺跡	29
3. 石行遺跡	29
4. 古瀬(道寺)遺跡	29
5. そ　の　他	30
VI ま　　と　め	31
参考文献	33
報告書抄録	63

挿図目次

挿図1	調査遺跡及び周辺遺跡位置図	3
挿図2	調査位置及び周辺地図	4
挿図3	基準メッシュ図区画調査位置	5
挿図4	調査区遺構全体図	6
挿図5	土層堆積状態	11
挿図6	瓦窯址1全体図・断面図	12
挿図7	瓦窯址1瓦出土位置	13
挿図8	工房址1全体図	14
挿図9	工房址1カマド	15
挿図10	工房址2全体・土層図	17
挿図11	土坑1全体・土層図	17

昭和28年の調査・挿図目次

図 I	金井原窯址平面及び断面略図	21
図 IV	「アンキア」型箋	25

図版目次

第1図	瓦窯址1出土遺物	36
第2図	"	37
第3図	"	38
第4図	工房址1出土遺物	39
第5図	工房址1・工房址2出土遺物	40
第6図	工房址2出土遺物	41
第7図	遺構外・昭和28年出土遺物	42
第8図	昭和28年・石行遺跡・如来寺境内・遺構外出土遺物	43

写真図版目次

図版1	発掘調査前	46
図版2	瓦窯址1	47
図版3	工房址1	48
図版4	"	49
図版5	工房址2	50
図版6	"・調査区全体	51
図版7	瓦窯址1出土瓦	52
図版8	"	53
図版9	"	54
図版10	"須恵器・工房址1出土瓦	55
図版11	工房址1出土軒先平瓦	56
図版12	"丸瓦・土師器・須恵器	57
図版13	工房址2出土瓦	58
図版14	"土師器・須恵器	59
図版15	昭和28年発掘調査出土瓦・石行遺跡出土瓦	60
図版16	如来寺出土瓦・調査スナップ・指導	61
図版17	調査スナップ・現場説明会	62

I 経 過

1. 調査に至るまで

飯田下伊那地区で、確認されている古代の布目瓦を焼成した窯址は2カ所あり、当上野遺跡金井原瓦窯址と竜丘地区の万寿山の西方500mにある堤洞瓦窯址である。

上野遺跡は、飯田市座光寺の中位段丘にある小段丘に所在し、上位段丘崖直下である。金井原瓦窯址は小段丘の西部が、本沢に切られた斜面に築かれている。

金井原瓦窯址は、昭和28年に地主であった宮澤恒之氏（上郷考古博物館長）が発掘調査し、その結果を『伊那』誌上に発表し、当瓦窯址は広く人々に知られている。

金井原瓦窯址の周辺で、布目瓦の出土する場所（遺跡）は南200mの如来寺、東300mの古瀬平遺跡、北東900mの石行遺跡（飯田工業高等学校敷地）と、最近高森町下市田古瀬遺跡で出土している。

座光寺地区の上水道使用量の増加に対応する為、当瓦窯址と東側に配水池建設が計画された。水道局と教育委員会の協議の結果、瓦窯址は再発掘調査・他の用地内は発掘調査を行ない、記録保存して後世に伝えることとなった。

2. 調査の経過

諸協議の結果に基づいて、平成6年4月8日（金）に資材の運搬を行ない、11日から発掘調査に着手した。瓦窯址の位置は、耕土を剥がし確認した。段になった水田部分にはA・B・Cのトレンチ3本を入れ、瓦・須恵器の出土が2ヶ所に確認でき、その場所を重機で広げ調査した。遺跡までの道が狭く、ミニバックホーが自走で入るしか無く、拡張部分も限定されてしまった。遺構を掘り下げて精査し、写真撮影・測量を行なった。調査部分の全体写真は、ラジコンヘリによる空中写真を撮影した。

その後、平成8年3月末まで飯田市考古資料館において、現地で記録した図面・取り上げた遺物・写真等の整理作業を行ない、当報告書作成作業にあたった。

また、出土瓦の検討にあたり、京都国立博物館の森郁夫氏の指導により西三河北野系の瓦としての姿が明確化され、関連して岡崎市斎藤嘉彦氏からは北野系の瓦についての資料恵与をはじめ具体的なご配慮をいただいた。さらにまた、名古屋市立博物館梶山勝氏には、愛知県下出土瓦との比較の観点に多って、細部にわたって有益なご指導をいただいた。

3. 調査組織

調査担当者 小林 正春

調査員 佐々木嘉和・馬場保之・山下誠一・吉川 豊・吉川金利・福澤好晃・下平博行

作業員 伊坪 節・井上恵資・今村春一・木下喜代恵・木下貞子・木下政利・木下義男・熊谷義章・久保田繁穂・小池寛希・坂下やすゑ・佐々木文茂・代田和登・中平隆雄・服部光男。

原田四郎八・福沢トシ子・正木実重子・牧内 修・松下成司・松下真幸・溝上清見

森 章・柳沢謙二・吉川正実

整理作業員 新井ゆり子・池田幸子・金井照子・金子裕子・唐沢古千代・木下早苗・木下玲子・柳原勝子・小池千津子・小平不二子・小林千枝・斎藤徳子・佐藤知代子・田中恵子・中島真弓・丹羽由美・荻原弘枝・平栗陽子・福沢幸子・古根素子・牧内喜久子・牧内八代・松本恭子・松島直美・三浦厚子・南井規子・宮内真理子・森藤美知子・吉川悦子・吉川紀美子

指導 宮澤恒之 飯田市上郷考古博物館長（元飯田市立三穂小学校長）

森 郡夫 京都国立博物館考古室長（現帝塚山大学教授）

斎藤嘉彦 愛知県岡崎市

梶山 勝 名古屋市立博物館学芸員

事務局 飯田市教育委員会社会教育課 横田 穆 社会教育課長

小林 正春 社会教育課文化係長

吉川 豊 社会教育課文化係

山下誠一 "

馬場保之 "

福澤好晃 "

吉川金利 "

下平博行 "

伊藤尚志 " H6年10月より

岡田茂子 社会教育課社会教育係



1. 上野遺跡・金井原瓦窯址
 2. 座光寺原遺跡
 3. 宮崎A遺跡
 4. 宮崎B遺跡
 5. 大門原B遺跡
 6. 大門原D遺跡
 7. 大久保遺跡
 8. 中島遺跡
 9. 恒川遺跡群
 10. 石行遺跡
- A. 新井原12号古墳 B. 菩地1号古墳 C. 高岡古墳群 D. 新井原古墳群

図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査地点及び周辺地図

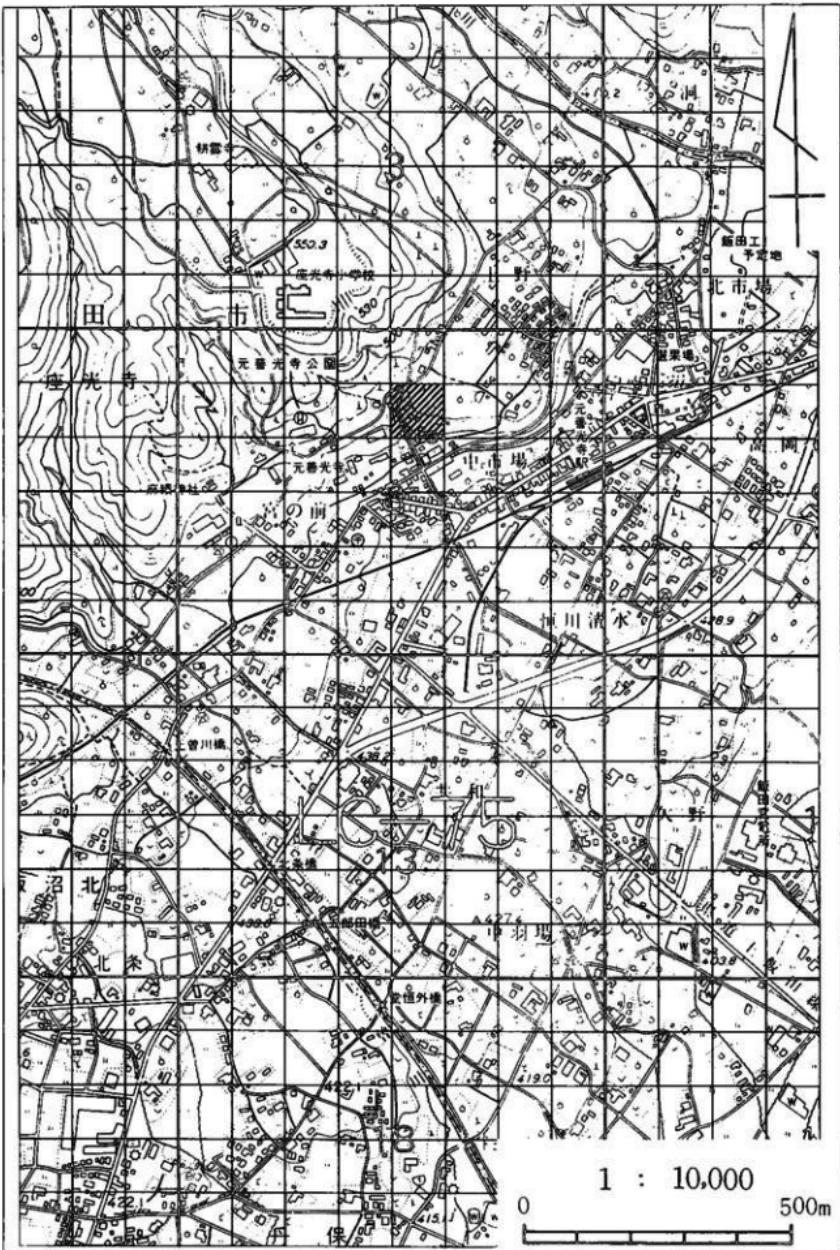
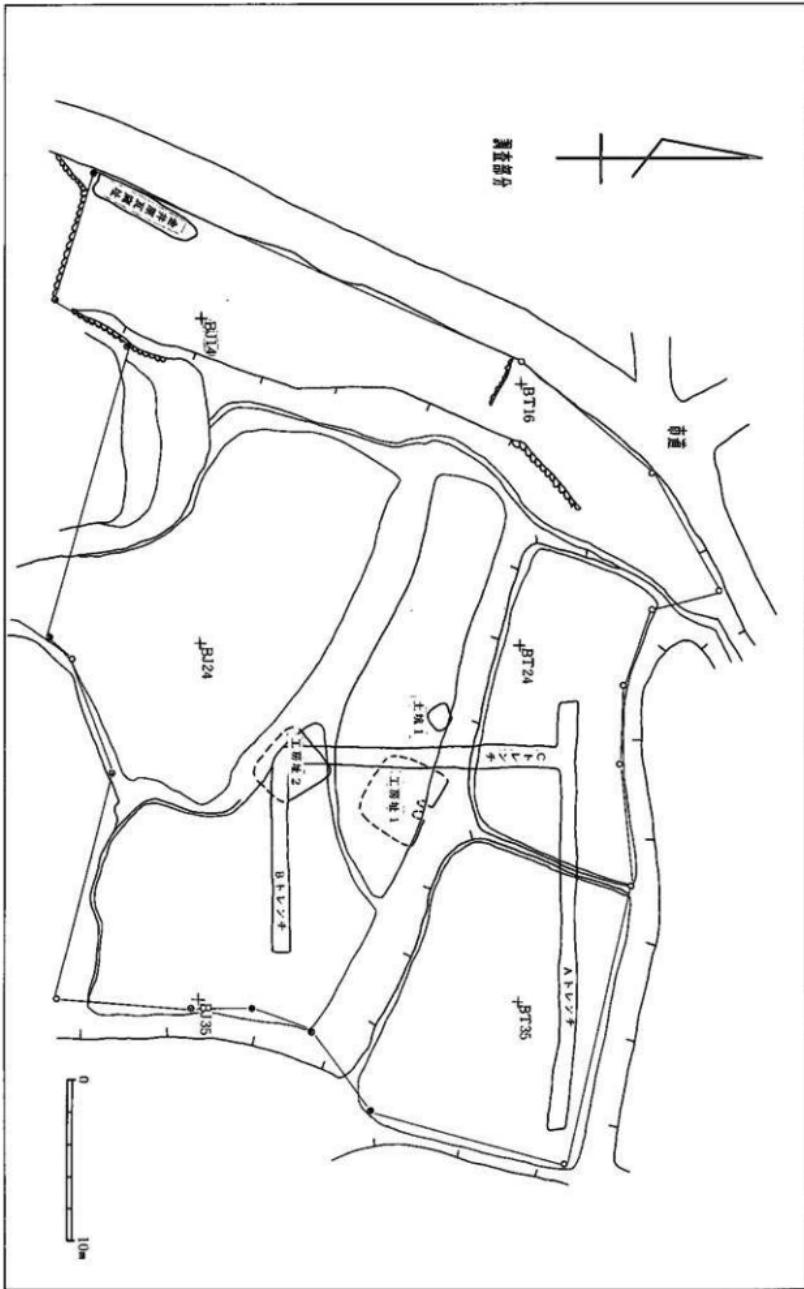


図3 基準メッシュ図区画調査位置

図4 調査区地図



II 遺跡の環境

1. 自然環境

上野遺跡は、飯田市座光寺上野地籍のほぼ全域である。

飯田市座光寺地区は市街地の北東4kmに位置し、北東を下伊那郡高森町東南は天竜川をはさんで同番木村、南西は飯田市上郷で市街地に続く。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両アルプスの間を天竜川が南流する。アルプスの形成に関わる造山運動に伴った断層により、谷状盆地・大きな段丘が形成され、それを天竜川に流入する河川が切断し、複雑な段丘地形を呈している。座光寺地区は中央アルプスの前山から、谷中央の天竜川に至り綫長の三角形に近い形をしている。断層で形成された大きな段丘崖2段が横断し、上・中・下段と分かれる。各段丘は小河川に切られ、段丘上には幾つかの小段丘があり、各崖下には湧水が出ている。

上野遺跡は、東方に開放された中位段丘上にあり面積的にはさほど広くない。上位・中位の段丘面とはそれぞれ、高低差20mを測る小段丘上である。金井原瓦窯址は、南西端近くの小河川本沢に解析された南西斜面にある。

2. 歴史環境

座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地は20余あり、地区内にある遺跡の時期別分布は、上段地帯に縄文・弥生時代の遺跡があり、山寄りに縄文時代の遺跡分布密度が濃くなる。地区を横断し、上段と中段を分ける段丘崖の上段端部に中世山城、中段には縄文時代から近世迄の遺跡が複合して分布している。

地区内には古墳が多く、畠地からの遺物出土も多く、住民には土器・石器に興味を持つ人も多い。詳細な記録は乏しいが、江戸時代から明治時代に古墳を削平し桑園にした時点で、遺物を採集し保存している家が複数存在する。

地区内の埋蔵文化財・古墳等の調査を概観すると、発掘調査の最初は、大正11年11月に伊那電（現JR東日本鉄道飯田線）の施設にかかわって調査された、新井原12号古墳（大塚）（注1）である。この頃、鳥居龍藏氏による遺物調査が行なわれている。大正12年には鞋地1号古墳の石室が、座光寺小学校職員と高等科生徒によって清掃調査され、銀製の「垂飾付長縞式耳飾」が発見されている。その後、昭和30年代の後半まで記録が無く、破壊のみが進んでいたと思われる。

昭和37年（1962）には、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事用採土に先立ち、下伊那教育会歴史調査部によって、座光寺原遺跡（注2）が調査され弥生時代後期の「座光寺原式」が設定されている。

その後、いくつかの発掘調査が行なわれ、昭和45年には中央自動車道に伴う発掘調査で、座光寺地区では宮崎・大門原など5遺跡（注3）が調査された。

昭和50年（1975）には、中島遺跡（注4）で農業構造改善事業に伴う調査が道路部分について行なわれた。

座光寺考古学研究会・下伊那教育会考古学委員会によって行なわれ、当地方弥生時代後期様式である「中島式」の設定の元となった。

昭和51年（1976）度から、一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当飯田市教育委員会によって行なわれた。その結果、恒川遺跡群（注5）は多期にわたる遺跡の密集地であり、かつ重要遺構。遺物の出土があり、古代伊那郡の推定「郡衙」の一画として注目された。恒川遺跡群内に「郡衙」の確証を得るべく、昭和57年度から国・県の補助事業「恒川遺跡群範囲確認調査」が始まり、平成6年度調査で「正倉」の一部が確認された。「郡衙」の所在が確定され、範囲の確認と内容の把握が今後の調査に課せられている。

昭和60年（1985）、飯田工業高校の移転新築に先だつ調査が、石行遺跡（注7）で行なわれ、縄文時代早期から平安時代までの遺構・遺物が検出され、古墳も新井原2・4・5・15・16・17号古墳と高岡4号古墳が調査された。

昭和63年（1988）度には、座光寺バイパス両側の開発に伴う発掘調査の報告書（注8）が発刊され、バイパス調査の遺構の続きが明確にされた。

平成元年（1989）、飯田工業高校の南で市道の新設が行なわれて、高岡3・4号古墳（注9）の調査がされ、統いて平成2年（1990）に、高岡3・4号古墳から約30m東に離れた、新井原18号古墳（注10）が、飯田工業高校々友会館新築に伴って調査された。

又、恒川遺跡群の一角、新屋敷遺跡が平成元年（1989）（注11）民間開発に伴って調査された。

以上の地区内における、埋蔵文化財の調査結果のいくつかを踏まえ、地区内の歴史的変遷を記述するところである。

当地区内において、最初の人々の足跡は、縄文時代草創期の有舌尖頭器の出土例によるが、更に古い旧石器時代から人の住んでいた可能性が高い。縄文時代においては、その早期から晩期まで途切れることなく各時代の遺物が、上段。下段の区別なくほぼ全域から発見され、伊那谷全体における座光寺地区の位置からみても地域の中心的な役割を果していたと判断される。

続く、弥生時代では伊那谷における、中心的な地であった姿がより明確にとらえられる。それは、弥生時代中期から後期にかけて、恒川式・座光寺原式・中島式と三つの様式遺跡が存在し、各期の大集落が展開していたことによる。

古墳時代は、現存する古墳は10基余であるが、下伊那史には古墳総数66基の記録があり、近年の調査で確認されたものを加えるとその数は70基となる。前方後円墳の高岡1号墳（県史跡）を盟主とする古墳が構築された事実や、その副葬品をはじめとする内容も傑出したものばかりであり、伊那谷の該期を代表する地区の一つとなっている。

続く、奈良・平安時代においては、当地区が歴史上最も注視されるべき時代といえる。それは、先述した恒川遺跡群における、古代伊那郡衙址の存在であり、定額寺の寂光寺が記録にみえる。当金井原瓦窯址もこの時代の遺構であり、昭和28年に地主の宮澤恒之氏が発掘している。そこで焼成した瓦を使用した寺院等の具体的な地点の特定はなされていない。

のことから、伊那谷の政経の中心であったことはいうまでもなく、さらに東山道の通過する郡衙として大和朝廷による国政遂行上でも重要な役割を果たした地であったといえる。

次時代の中世以降は、当地区的歴史資料の希薄な時代であり、南本城・北本城の二城址があるにもかかわらず、具体的な歴史事実は不明な状況である。しかし各所で行なわれている埋蔵文化財の発掘調査において、

輸入磁器を含む他に例のないような優品の出土があり、文献には登場しないまでも一定の勢力を持つ豪族の生活拠点であったことは推測に難くない。

以上のように、各時代それぞれに重要な意味をもつ歴史背景の認められる地区の中に、当上野遺跡金井原瓦窯址がある。そこは、小段丘南西端部の緩斜面であり、段丘面全体の調査はまだなされておらず、今後明らかにされるであろう事実の積み重ねにより、地域での位置づけが具体的に示される遺跡と考えられる。

- | | | | |
|------|-----------|-----------|-------------------------|
| 注 1. | 市 村 威 人 | 1955 | 『下伊那史』第2巻 下伊那誌編纂会 |
| 2. | 今 村 善 興 | 1967 | 『長野県考古学会誌』4 「飯田市座光寺原遺跡」 |
| 3. | 長野県教育委員会 | 1970 | 『中央道調査報告－飯田地区』 |
| 4. | 宮 澤 恒 之 | 1967 | 『長野県考古学会誌』4 「飯田市中島遺跡」 |
| | 座光寺考古学研究会 | 1976 | 『伊那』3 「飯田市座光寺中島遺跡の調査報告」 |
| 5. | 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』 |
| 6. | " | 1982～1994 | 『恒川遺跡群範囲確認調査概報』 |
| 7. | " | 発刊準備中 | |
| 8. | " | 1988 | 『恒川遺跡（田中・倉垣外地籍）』 |
| | " | 1991 | 『恒川遺跡（田中・倉垣外地籍）』 |
| 9. | " | 1990 | 『高岡遺跡（高岡3・4号古墳）』 |
| 10. | " | 1991 | 『高岡遺跡（新井原18号古墳）』 |
| 11. | " | 1991 | 『恒川遺跡群・新屋敷遺跡』 |

III 調査結果

1. 土層堆積状態

今次調査地点の土層堆積状態は、段丘端部の緩傾斜の畑とその斜面を造成して水田を作っており、土層は単純ではば2層である。

金井原瓦窯址のある畑は、10cm前後の耕土の下に黄褐色の砂質ロームが50cmあり、その下は礫の多量に混じる伊那層である。

工房址を検出した水田部土層は、上部BU38の深掘り（挿図5を参照）で、最上面に灰色粘土が50cmありその下が淡褐灰粘土70cm、その下が地山の黄色砂質ロームで下部はグライ化して青黄色土を呈する。調査区下方では、灰色粘土が30cmの下に黄色砂質ロームが10cmあり、礫の多量に混じる伊那層である。

2. 遺構

1. 奈良時代

1) 金井原瓦窯址1（挿図6・7 第1～3図）

金井原瓦窯址1は、段丘崖を流下する本沢の急流左岸直上に構築されており、今回の開発用地の西隣に位置する。昭和28年に一度調査が行なわれているが、今回の開発による進入道路で削平されて消滅するため再調査を実施した。

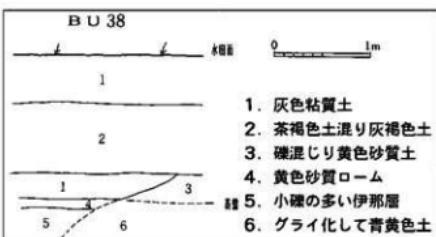
本瓦窯址は標高466～468.30mの間で、傾斜角10°の南西向き緩斜面にあり、比較的堅い黄褐色土の地山に掘り込んで、窯底20°前後の傾斜で築かれている。窯内は、昭和28年の調査時に埋め戻されており、土層断面は窯壁の未調査の部分を主体にした。

窯体は傾斜面に直行して築かれ、窯下部の焚口は宅地造成で破壊されており、本来はもっと長く本沢のきわまで至っていたと推測される。窯の構造は、半地下式無段の窯窓で、地上部はカマボコ型の天井部を持つ形態が想定される。

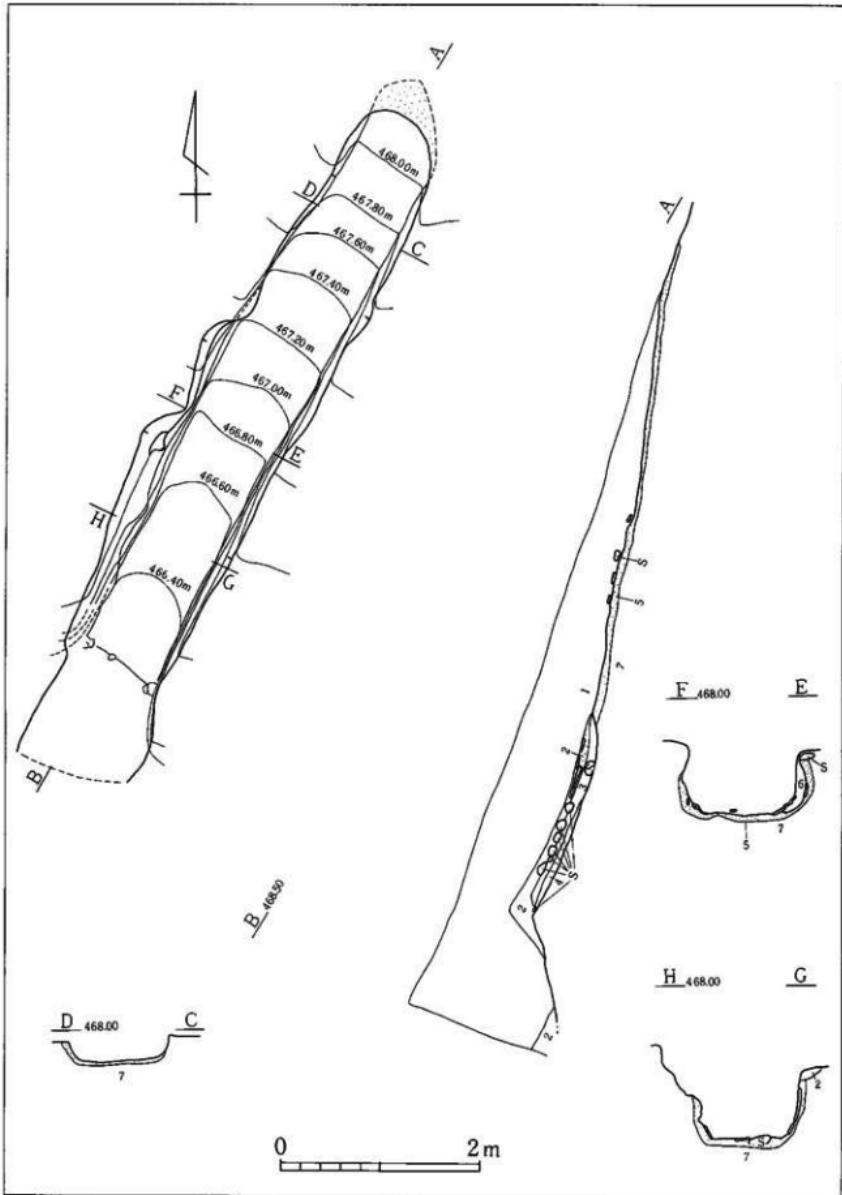
調査した窯址の規模は長さ6m・幅0.8～0.9m、残存している壁の高さは最高で0.7mを測る。窯体の最下位の底部高は標高466.29m、最上部の底部高は標高468.18mで中軸線の方位はN30°Eを測る。

全体の平面形は、長方形であるが中央でごくわずか、くの字状に曲がり焚口から上部まで収束する部分はない。焚口は破壊されているが、残存部分の1mは傾斜がわずかで燃焼部と判断した。底には石が敷かれおり焼土の状況から2面の底部が確認できた。燃焼部をすぎると、傾斜23度を測る焼成部で、傾斜変換点から窯底最上部から出土した瓦まで3.8mある。それより上が煙道と判断される。

燃焼部の底部は、部分的に瓦が敷かれており中央がやや高くなっている。瓦の上間に焼土があり非常に



挿図5 土層堆積状態

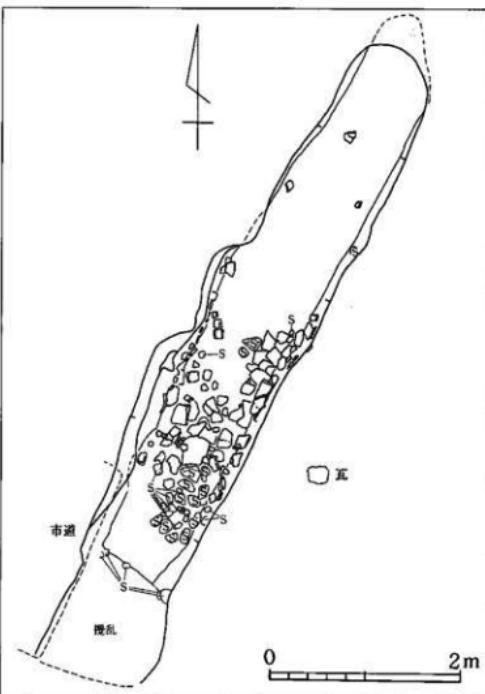


1. 搾乱
2. 暗褐色砂質土(炭・焼土混じり)
3. 黄色砂土(焼土ブロック混じり・堅い)
4. 褐色砂質土(焼土ブロック混じり)
5. 地山の焼け
6. 粘土
7. 碎混じり黄色砂質土(基盤)

挿図6 瓦窯址1 全体図・断面図

堅くなっていた。底部の地山は、場所によつて10cm下まで赤色。黒色に焼けていた。敷かれた瓦の他に、丸瓦・平瓦の破片。石があり、焼成時に瓦を垂直に保つための窯道具と考えられる。焼成部の側壁には瓦が埋め込まれておつり、2重に入った所もあった。瓦は、稻科植物のスサの入った粘土で埋め込まれており、大きな破片が多かった。

遺物は、壁に入れてあつた平瓦と底部出土の丸瓦・平瓦および窯道具としたらしい土師器・須恵器であり、瓦の出土量は多い。平瓦は幅の広い方を下にして図示したが葺き方は逆である。第1図1は底部出土の丸瓦で、焼成途中の物でなく土師器・須恵器と同様な窯道具と判断した。窯内部から丸瓦の出土はこれだけで、径が大きいので役物瓦と考えられる。2は窯壁に入れてあつた軒平瓦の小片で、形から役物瓦であり、頸は付けておらず瓦当に、簾状文が施される。簾状文は型押しではなく、2本に分かれれた籠状工具の刺突押し引きで、右から左に



挿図7 瓦窯址1 瓦出土位置

施文している。3も2と同様な軒平瓦で窯の底部から出土した。4～7は役物瓦である。7は幅25cmで瓦を止める直径8mmの穴があり、布目側からあけており反対側に穴の回りの粘土の盛り上がりをとった痕跡が残っている。第2図1～8は壁に入れてあつた平瓦で、いずれも灰褐色・灰色で、胎土に少量の砂粒を含み軟らかく、厚さは2.0～3.8cmあり、もっと厚く4cm近いものもある。第3図1～7も窯壁に入れてあつた平瓦である。8・9は窯道具と判断した。8は淡褐色を呈する坏の底部で、9は同色の高台である。両者共須恵器であろう。他に10点前後の小片がある。

瓦に残る布目を観察すると、ほとんど同種類の布を使用した様子があり、1cm当たり縦糸7本。横糸7本が多く、横糸が多くなるものがあり、それは桶（模骨）に布を巻くときに引っ張って巻いたためと判断した。

2) 工房址1（挿図8・9 第4・5図）

瓦窯址から北東40mの窯築造位置とほぼ同程度の傾斜地に検出した。瓦片の出土から、当初別の瓦窯址の存在を考えたが、カマドの確認により、形態としてはいわゆる竪穴住居であることが判明した。約10°の傾斜地に築造された施設であるために、傾斜下方にあたる南側部分の確認は不能であり、上方部分についても水田造成のためカマド及びその周囲の壁と床面5×3m程を確認した。想定される規模は一辺が4ないし5mの方形の竪穴である。柱穴は精査したが検出床面では確認できなかった。カマド裏の壁にかかる柱間2mの柱穴3本を検出したが、中間と左側2本は床面より高い。主軸方向は、カマドの方向からN41.5°Eを測る。残存部の壁高は30cm前後であるが水田造成時に削平されている可能性もある。残存部の床面は比較的

良好で、カマドの左側に 1.3×1.2 mの範囲で、緩く10cmくぼんだ所があり、細かな炭が混じって黒色を呈していた。カマドは北東壁にあり、石と軒丸瓦を芯にした袖を持つ形態である。支脚は石で、下部の細い三角形である。煙道は削平により確認できなかったが、自然地形を利用し、傾斜上方に延長したものと推測される。焼土は全体的に少なかった。

遺物は、調査面積に比較して多く、土師器・須恵器・瓦がある。

第4図1・2は土師器で、1は壇で図の1/5現存している。2は黒色坏の破片で、底部半分と高台が少し現存している。内面の摩耗が著しく、黒色の部分はわずかである。

3・4は須恵器壺の破片であり、両者共に内面はきれいにすり消されている。5は蓋の小破片である。6～10は須恵器の坏小片で、すべて高台付であり、9を除いてほぼ同形である。

カマドの袖芯材は丸瓦と石で、第4図11～15第5図2・3・5である。第4図11・12は軒丸瓦の瓦当片である。瓦当部は半欠で、全体の文様は確認できない。瓦当の直径13cm前後、外区は幅1.5cm前後の外帶部があり、その外帶中央に沈線が一周する、二重圓文である。内区は素弁の六葉蓮華文で、その弁間には珠文を配している。中心部は欠落するが、高森町古瀬遺跡例と同様の中心に一個の蓮子を置き、回りは丸く凹んでいると思われる。13は割れてカマド中央直前から出土し、外帶部二重圓文は残っているが内区は素弁がごく一部確認されるだけである。14・15もこの場所から出土した。14は赤褐色を呈する破片で堅致である。約

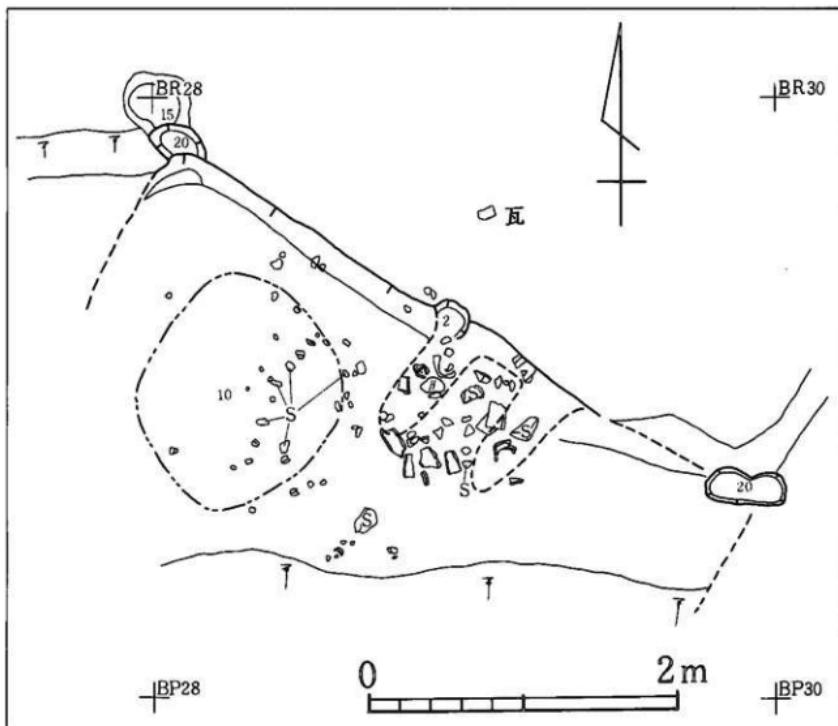
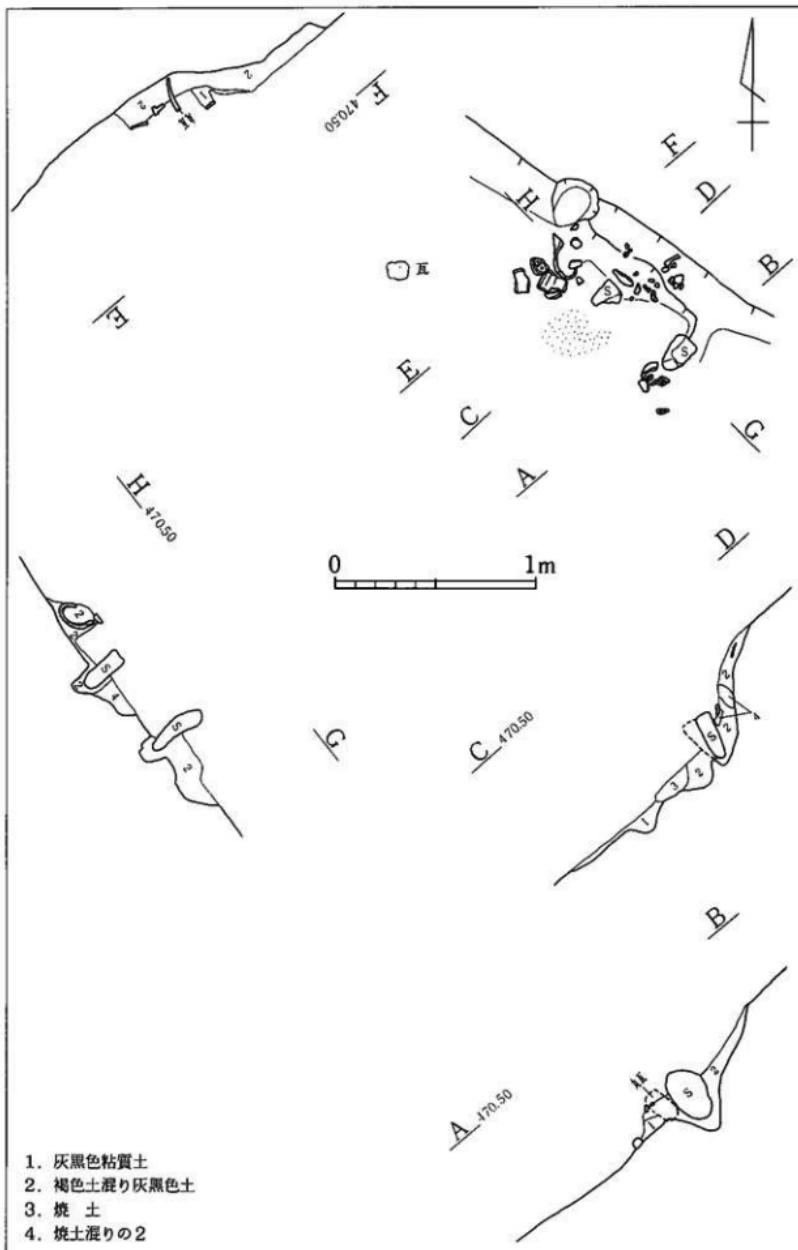


図8 工房址1 全体図



挿図9 工房址1 カマド

3/1現存しひつに割れて出土した。15は14の左隣から出土し、黒灰色で堅致であり焼き歪みがある。第5図1はカマド中央の直前から、2は右袖中から、3は左袖中に入っていた軒丸瓦で、瓦当部内区と体部をわずか欠く。丸瓦部分の焼き歪みは著しいが、焼成は良好で堅致である。外側には須恵器壊の破片が3点溶着している。瓦当部の内区はきれいに剥離しているが、そこには布目が無く柾（横骨）の凹凸もきれいに撫でて消している。丸瓦端部内面の布目に布目間隔の異なる部分が一ヶ所認められ、横骨を被った布を補修したものの使用が推測できる。同様の布目部分が第1図4・5にも認められる。5はカマド右袖に入っていた。6は工房址1の、図化できたただ一つの平瓦で、軒先瓦である。カマドの中央から出土し、わずか欠けているだけであるが、焼きひずみが著しく変形している。外側には、わずかであるが布に着いた粘土が付着しており、瓦当部は櫛状工具で二本の沈線を施し、3重孤文である。端部の状況から、切り離し後の施文と判断される。外側に粘土を1~2cm巾でわずか盛り上げ瓦当部を厚くしている。施文した工具は、瓦窯址から出土した2列の刺突（簾状）文を施した工具と、施文の幅から見て同一である。

遺構の形態は、いわゆる竪穴住居址であるが、瓦窯に近接する傾斜地にあえて築造されていること、瓦片の出土、カマド芯材への焼け歪み瓦使用等を勘案して、瓦窯運営にかかわった職人に関連した施設として、単に住居址とするのではなく、工房址と判断した。

3) 工房址2（挿図10 第5・6図）

工房址1のカマドから南の斜面下方5mの所で、想定される規模4×4mの竪穴遺構を確認し、工房址2とした。水田の造成により下方の部分を切られ確認範囲はわずかである。調査部分にカマド等施設は検出できず、主軸方向は確認できないが、傾斜方向に合わせた竪穴となる。覆土は5層で、北側の傾斜上方から土砂の、流れ込み状態が把握できる。壁高は、確認できたところで53~8cm、斜面を掘り込んだために壁高に幅があり、状態は垂直に近く急である。床面は、比較的平坦であったが、地山の石（2~5cm）が露出している部分もある。主柱穴は、床面を精査したが検出できなかった。

遺物は、土師器・須恵器・丸平瓦である。

第5図7~16は土師器・須恵器である。7・8は土師器壺の口縁片で、わずか現存しており、胎土には小石粒が多量に混入している。9は高台のみ全周現存している。淡褐色の土師器様の色調を呈するが、貼付部で剥落した須恵器瓶もしくは壺の高台部である。10~12は須恵器壺の小破片であるが、厚さ・胎土・色調から見て同一個体である。13は蓋の小片で、紐の付くことが認められる。14は美濃須恵器の壺で1/8現存し、胎土は水窯され非常に良好で、堅致で褐白色を呈している。15は高台の付く形態である。16は淡褐色を呈した皿で、実測部の1/3現存する。胎土は非常に細かく、綠釉陶器の胎土に似ている。

第6図1・2は丸瓦で1は軒丸瓦であるが、瓦当部分が貼り付け部から剥がれて無い。内側の布目は、横骨の凹凸を箆で消しているので部分的に残っている。褐灰色で堅致であり、焼き歪みは無い。3~9は平瓦で青灰色に焼け堅致であるが、すべて焼き歪みがある。3は小形であるが、端部の切り離し状態が通常の平瓦とは異なった役物瓦の半欠である。4は軒平瓦で、瓦間に頓は付けておらず簾状文を施している。第1図2・3と同じ施文である。6は平瓦であり、表面に瓦の溶着した痕跡が残り、窯入れの状態を推測できる資料である。

他に図化不能であるが、焼きの甘い瓦小片が多数出土している。

遺構の状態としては、竪穴住居址的であるが、カマドなど住居施設はみられず、工房址1以上に作業場的である。遺構の配置状況からみて、窯址。工房址1および同2が同時存在し、一体となってこの地での瓦生

産をなし得たと考えられる。

2. 時期不明

1) 土坑1(挿図11)

工房址1の北西約3m、B N26に検出した。やや台形をなす方形で、規模は1.6~1.2m、長軸はN45°W。底部迄の深さが約50cmあり、西壁下がやや深く、東側から緩く傾斜している。基盤の黄褐色粘質土を掘り込み、その下の砂礫層に達している。覆土は3層で、自然堆積である。

遺物の出土は無く、時期・性格共に不明であるが、工房址1に近くまたこのグリットからは須恵器片の出土もあり、工房址1に関連した施設の可能性もある。

3. 遺構外出土遺物

1) 弥生時代(第7図1・2)

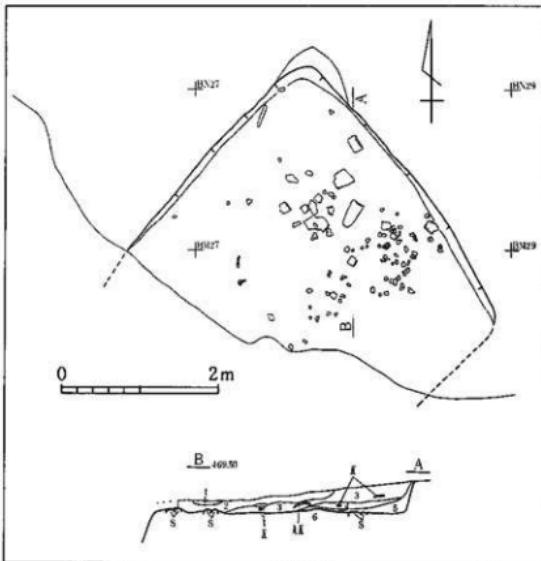
図化した、該期の出土遺物は1・2の2点であるが、小破片で弥生時代と認められる物も若干ある。工房址2の西側B M・B N26主体に、基盤の上、茶褐色土から出土した。第7図1・2は同一個体で、後期終末の中島式壺であり、器壁は薄く整形。胎土・焼成ともに良好である。口唇部は急に折れ、無文である。該期の遺構は検出できず、田の造成時に削平された遺構が存在したことを考えられる。

2) 奈良時代(第7図3~5)

トレンチ。グリットで取り上げた遺物で、図化した他にも小破片は工房址1・2の周囲から出土している。図化したのは、3個すべて須恵器である。3は壺の頭下部で、肩部もわずか残っており、内側はきれいに擦りされている。口縁部の両面には自然釉がかかるが、外側は降りかかったのではなく横から吹き付けられた状態である。4・5はCトレンチの遺物で、工房址1・2のいずれかに付属する可能性がある。4は軟らかい焼成の壺で、内外面共に摩耗している。5は美濃須恵器で、胎土は水練され非常に良好である。

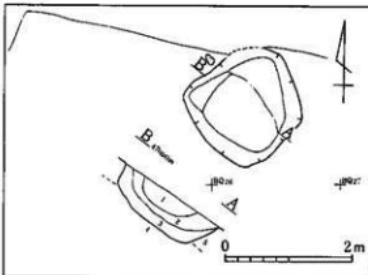
3) 中世(第7図6)

調査範囲内の各所から散発的に少量出土しており、擂鉢・白磁を真似た陶器皿・鉄軸の皿・灰釉をかけた碗等10片余



1. 黄色砂土 2. 黒褐色土 3. 茶褐色土 4. 灰色色土
5. 黄褐色粘土質土 6. 黄褐色砂礫(基盤)

挿図10 工房址2 全体・土層図



1. 茶褐色土 2. 黒褐色土 3. 黄褐色土
4. 地山(砂礫) 5. 地山(黄褐色粘土質土)

挿図11 土坑1 全体・土層図

ある。6は白磁を真似た端反の皿で、見込みに陰刻が施され、全面淡い枯れ葉色の灰釉が掛けられている。
出土状態から、関連する遺構の存在は考えられず、周囲に廃棄されたものが流れ込んだと判断される。

4) 時期不明(第8図8~10)

8・9は打製石斧で、前者は使用痕が残り塩基性岩製で、後者は表面の風化が進んでおり緑泥岩製である。
10は横刃形石器で硬砂岩製である。8の打製石斧は瓦窯址横の攪乱から出土し、他は基盤の近くからである。

IV 昭和28年の調査

金井原瓦窯址については、先述のとおり、昭和28年に宮澤恒之氏により学術調査がなされ、今回の調査は2次調査ということになる。当然第1次調査で確認できたが、今次調査では確認不能の部分もあり、その報告の全文を再掲させていただき、2回にわたる調査結果を総合して本窯址の具体的な姿を探ることとした。

下伊那郡座光寺村金井原瓦窯址報告

『伊那』1953-12 1954-2・3

宮澤恒之

1. はじめに

吾が国の瓦が飛鳥朝に於ける百濟式瓦に始まると云うことは既に明らかにされた事実であり、表側に刻まれた布目絵様に大いなる特殊性の存することなど今更に言を要しない。しかし繩文或いは弥生式時代により長足な進歩を遂げた現在の考古学界に於て、一部の学研者を除き「瓦研究」は一般化されていない。そしてより実際的な製造、窯法などの問題になると量的に石器時代のそれと異なり、特定な場所を除き稀であり、且つ未だ厚いペールにおおわれて研究に困難さを増す。

幸い、本郡に於ては大正年間の鳥居博士入伊以来、特に石器時代を中心として活発化された考古学研究の結果、多くの史実実証がなされて来た。その内の一部古代窯跡も現在迄に郡下10ヶ所ばかり発見され、斯界に種々の好条件を提供している。その中瓦窯跡は竜丘村堤洞（原形をとどめず）と当金井原瓦窯址のみであり、確かなる結論を得ないままにいる。当址に対する私見が瓦窯考への一助ともなれば幸いと思う次第である。

尚調査、筆稿に対し絶えず、ご教示願った郡誌編纂会の市村咸人、宮下操先生を始め明大松島君、協力願った下伊那考古学研究室の諸君に厚く感謝する次第である。

2. 調査過程

本址の発見の直接動機は、昨年の三月以前に布目瓦の出土を耳にし、偶々踏査の際に二片の白っぽいゴツイ布目瓦を採集した。

當時に於て（現在でも同じであるか）瓦に対する確かなる見聞もなく、誰がなる知識のもとに、なんら具体的な調査も不可能なるにまかせそのままになっていた。尙が今年の三月始め、先に発見した白っぽい瓦片が前に落ちず同じ地点に於てポーリング調査を思い立った。その結果窯址窯部を発見しほぼ窯址の形状を知るに至った。

調査の日誌の一部を掲げ調査過程を思い出そう。

一九五二年三月二二日 座光寺村上野に於て布目瓦採集。

新発見也。白色にて完全に焼けていない。如来寺より瓦の出土を聞くが果たして同じものであらうか。
一九五三年三月五日 一年前に発見した布目瓦出土地点ポーリング調査。地下三〇厘米位の處より焼けた赤色の土が存在する。

窯址なりや？

六日 午後スコップを肩にし調査に赴く。十度前後に傾斜する為か下の方に行くに従い焼土が深く存する。

一米四方に表土を除き焼土、自然土の限界を定める。南北に長く約九〇畳ぐらいの幅で下方に続くものらしい。焼土は赤褐色、固くスコップも曲がりそうだ。一番上（北の端）の部分に現われているのが煙出しの部分であらうか、略三片ばかり白褐色の布目瓦片を得る。

七日 午前中に編纂室へ報告に行く。更に下伊那考古学研究室の諸君に協力を頼む。午後昨日の続調査。

八日 研究室の松島、春日、松下君の応援を得る。全長六米くらいだらうか。焚き口、上部側壁不明、上部（煙出しに近い方）より下に四米の所より二～三畳に堆積した著しい木炭木灰層が存在する。又底壁以外に褐色の瓦片が多數出土する。底壁に近い側壁には大型な瓦が立て並び壁の一部をなしている。上より二米二〇畳の所では表土二〇畳天上壁の崩れたものだらう。堅い焼土層が四〇畳、焼くべきものを支えたのか、固定ものか、瓦片と砂利を混ぜた一〇畳ぐらいの層の下に平らに固められた床壁が二五度位の傾斜で続く。松島、春日君ら神福村田村の古墳調査の為め午後中止。

九日 焚き口限界を見究める為床壁を追う。上方より約六米二〇畳の所より床面に径一〇畳大石が敷き並べられているが、確かなる限界をつかみ得なかった。

十日 前日迄の調査を基にし、編纂会の市村、宮下先生、研究室の松島、松下、春日、勝又、安藤君の応援を得、最終的結論を得ようと張りきる。座光寺小学校伊谷校長、塩沢先生、役場、農協の人達、元善光寺住職、鳳越高校郷土班の大場、矢沢、川中島、湯沢君ら諸氏見学があった。

二九日 側壁が二重になっているのを知る。即ち窯内部から云うと先ず、瓦を裏にしてはりスサ入りの壁をつけ、これがも一重外側に存在する。

かくて三月二九日をもって一応の調査を完了した。以下これらの結果について報告し、私見を少し述べようと思う。

3. 金井原窯址の位置と現状

当窯址は長野県下伊那郡座光寺村大字上野字金井原地籍に所在する。天龍河成段丘第四段丘座光寺原段丘の東端に、天龍川と同支流南大島川との作用により、第五段丘と第四段丘との間に高さ二〇米の段丘崖を持つ上野段丘が東に開いてあり、その段丘の南に次第にせばまって第四段丘崖に消え入るあたり、座光寺原段丘をかつての上野城跡の南崖を深くけずりながら東流する本沢に凡そ一〇度の傾斜をもって南面する傾斜地に位している。標高四八〇米、飯田線元善光寺駅より西方八〇〇米、同村小学校より東北に五〇〇米の地点である。

窯址附近の局部的地形について見ると、上野段丘が本沢により切れる凡そ十数米程の傾斜地の上半にあり、北は丘状のなだらかな畠地の段丘へと続いており、西はやや傾斜が激しく二～三〇メートルで第四段丘崖に接している。南は十度前後の傾斜で焚口の部分から十メートルばかりで本沢に断ちきられて、五メートルの崖で切れている。元善光寺裏手の參籠堂、相安院丘地と対している。南東は本沢により展げ崖下に村の主要部をなす市場、第五段丘の湿地帯、遠くに天龍の清流と、起伏豊かな伊那、赤石の山脈をよく調和させている。東は窯に接し小さな沢（？）が傾斜面を侵し入って水田となり更に段丘が続く。

附近から布目瓦を出土する元善光寺、善光屋敷との位置はどうであらうか。先ず前者は前述参籠堂の下の当り当窯址より二五〇米ばかり、後者は窯址の東に続く上野段丘崖下にあり、三〇〇米ばかり離れた所である。

窯址の地質層序は、先ず二～三〇樁の亞黒土の表土層があり、その下に（主に窯下半分にかけて）背部段丘崖からの洪積土層が崩れかぶさっている。一〇～二〇樁大の礫を多く含む二次堆積層が二〇～四〇樁の高さの側壁を残し、内部に天井壁の崩れている窯をつつんでいる。

窯は基盤洪積土、所謂ローム層を型に切り込んだものである。又東側に続く湿田地では一番上に四〇樁位の肥沃な腐植土が有り、その下に礫、砂利の混成層が一〇樁位で灰褐色の余り上等でない粘土層が堆積する。尚段丘崖下の市場南の水田地帯から近年迄瓦用の粘土を取っていたことを附け加えておく。

以上が概要であるが二方に丘陵をもち、本沢、東側の湿地帯を有し、且つ十度内外に傾斜する南斜面に設けられた当址は、登り窯として最も適した条件を具備し、更に需要地と当然考えられるべき善光屋敷、元善光寺とも近く製造場として最適の地であったと考える。

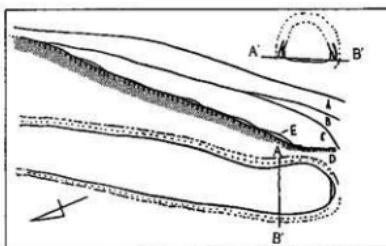
4. 窯の構造及遺物

窯はN三〇度Eの方向を持ち西南下方に焚口を設け東北に尻上がりの窓部を統一、更に煙出しを備えていたものと思うがその部分は現存しない。（図1参照）

全長六、二米、幅〇、七～十米で焚口の所がやや広く、焚口より十米の所で〇、七米、二米行った所、最も広く一米、上に昇るにつれて次第にせばめられ、五、五米の所で〇、八米あり無恰好な長方形をなしている。その形式は焚口、窓、煙出しを持つ。所謂登り窯であって前記の傾斜地に深さ数十樁の溝を掘り、二五度内外の傾斜に底壁を平らに固め、側壁に切り込んだ窓の壁に瓦を立て並べ、窓による「スサ」を混じた粘土壁を更にその上に瓦を立てかけその外側に「スサ」を混ぜ固め側壁をなす。天井壁はすでに崩れその高さなど知るべくもないが、崩れた断片で見ると十樁位の厚さで「スサ」を入れた壁は半円形をなしていたようである。残存する側壁は焚口部やや低く三〇樁であり、窓部中程迄四〇～六〇樁で、上半分は傾斜する表土層に平行し高さを減じ、五、八米の處で全く尽き果てている。これは傾斜する為、耕作中に欠き取られたものと思う。天井が落ちているので確かでないが、窓底面への垂直断面は底部を平らし、側壁が上に行くにしたがいせばめられた、カマボコ型状であったかと考える。

焚口は一〇樁大の石を敷き並べ、窓部に対しやや水平を保つ、この水平部が約一米続き平瓦、丸瓦の破片を敷き並べた窓部、即ち傾斜部が上に向って延びている。この窓部で注意しなくてはならないことは粘土、丸々花崗岩で固めた底壁の上に不完全完全、焼の瓦片を粘性の乏しい粘土と固め、図1に見る如く窓部の初まる所、これより上に向かって一、四米、二、二米、三、二米の所をやや高くしていることで、恰も階段式のそれを思わせる。いずれにせよ瓦の素形を並べよくする為の必要から生じた無段式（？）登窯構造上の特徴かも知れない。

又焚口より上方三米の処迄左右側壁に、底壁に一方をつけた大きい平瓦破片が立てられていたことは既に



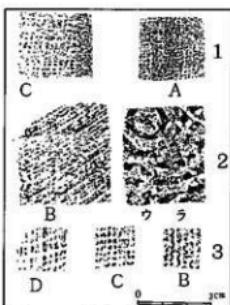
注 A. 砂礫層 B. 表土層 C. 側壁
D. ローム層 E. 届片粘土混層

図I 金井原窯址平面及び断面略図

述べて来たが焚口に近い處では立て並べた瓦片に著しいき裂が認められた。こんな処から窯業に必要な熱度の想像も可能かも知れない。既に述べたことであるが焚口水平部には二〇軒ぐらいに木炭、灰の堆積層が存在した。

窯を放棄する場合、不必要になった時と、突然の事故によって棄てられた場合との二通りが考えられるが、多くは不必要となって残されるものが多く、従って不必要になった場合遺物（製品）の発見も少ない。当址に於ては如何なものだろうか。製品の残らないという処のみ考えた時後者に當てはまるかも知れない。勿論その布目瓦の時代位置を決定するに最も大切な巴瓦、或いは宇瓦などの出土なく、単に窯に必要な焼き台的な或いは側壁の一部としての平瓦、丸瓦少量の須恵器片があるのみで、其の他附属として当然考えられる。失敗品の捨て場があったものと思われるが、窯址のみに終わった今回の調査に於ては確かにつきとめることが出来なかった。しかし、諸例などから推し窯の下方（本沢より）に存在したのではなかろうか。

次に底面、或いは側面につけられた瓦及び附近出土の瓦について考えてみよう。窯址に於て発見された瓦は既述の如く平瓦、丸瓦の破片のみで、いずれも灰褐色、或いは灰色をなし、胎土に量少の砂利を含む。厚さは一五～二五軒ぐらいのなかに三軒近いものもある。布目は平瓦の表側に、丸瓦は裏側に有するのを普通とすると言われるが当窯址に於けるそれも緒側に異わない（図II(1)）平瓦、丸瓦共に布目の反対側に繩文或いは櫛目文など全くなく、布目の特徴として(1)布目が荒い。(2)糸が太く硬い。(3)糸目が通る。などのことが一般的に見た時揚げられる。善光屋敷のもので（図III(2)）は如何なものだろうか。(1)布目あまり荒くもないが細かくもなしといった処、どちらかと言えば細かい方かも知れない。(2)縦糸と横糸の太さが異なり概して横糸が軟い。(3)糸目の通るものと通らないものとがある。灰黒色、赤色をなし、厚さ約二軒ぐらいである。内



図II
図のBの裏には四重の同心円文、或いは重圓紋の連続する青海波紋を有する私の今迄の見聞中唯一のもので他に例を見ない。他は裏面に文様なくその点に於て金井原と一処する。

次に元善光寺出土の瓦（図II(3)）では、(1)布目は荒く、(2)糸が太く硬いもの、その中でも縦、横共に太く硬いものと、縦糸太く硬く横糸軟いものがある。(3)糸目の通るものと通らないものとがある。灰褐色、灰色をなし概して他の二ヶ所のものよりいずれも厚く二～三軒で裏面に繩文を有するものが多い。又平瓦、丸瓦共に小片で確かではないが。その描く縦断面は二ヶ所出土のものよりは小さい弧をなす様である。尚図中Aの如くな重圓紋を有する瓦当とおぼしきものが出土している。

凡そ半分欠くが瓦当とし貴重なもので、先年竜丘村開善寺附近で発見された「庭仏」などと共に瓦の年代推定の重大ポイントとなるべきもので有り、一層研究を具体化するものである。詳しく述べると、厚さ凡そ二軒、灰黒色をなし凡そ一軒の周縁の内に○、五軒前後の四重の同心圓を作り中心に珠文（？）を有する。尚周縁、同心圓の間に外側より各々七、五、五、四、三、それに中央部に二孔をそれぞれ残す。

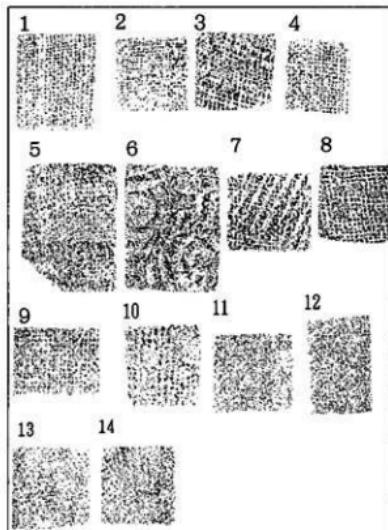
以上が当址及び附近二ヶ所出土の瓦の概略であるが、多くの布目瓦にあると言う寺或は地方を示す様な記号など全く認められなかった。当址より出土した少量の須恵器も瓦同様、小破片なるが故にその本来の器形など知ることは出来なかった。尚竜丘村堤洞窯址からも、布目瓦と共に須恵器が多量発見されていることをつけ加えておく。

5. 研究各論

其一 凡そ我が國に於て土器発生の上限は七~八千年前というのが定説となっている。説明する迄もないが土器は赤褐色をなし、焼成多くは軟く、従って焼かれる熱度も余り高くなく、定まった窯設備もなく地上（窯を築かずに）に置いて焼いたものと言われている。又この縄文時代に続く、凡そ二千年前から始まる弥生式時代の土器に於ては、すでに竪穴を掘り窯として焼かれたものと言われ焼成は良くなっている。しかしこれも仮想にしか過ぎず確かではない。弥生式時代に続く古墳時代（A・D 4 C）になると弥生式土器をそのまま発展せしめた土師器、それに朝鮮を経て新たに渡来したと言われる須恵器、さらに古墳建築上必要となった埴輪などその窯址は数多く発見されている。結局すでに古墳時代に於ては残るだけの設備技術を有していたのだろう。しかばば如何なる形に、どんなものが存するかと言うと、先づ土師器窯では、所謂平地式で、地表面を數十厘米深く切り込んだ方形、又は長方形の竪穴で、その大きさは普通一辺が三米前後、煙出しのないものと有るものがある。埴輪窯では平地式、登り窯式（窯窓式）とある様である。平地式では土師器窯と大差ないが登り窯には階段式と無段式のものがあり巾一米前後、長さ十米程である。下伊那に於て土師器或いは埴輪窯は確かなる址は未だ発見されていないが、六〇〇余基を数える古墳の存在などと考え合わせ当然相当量あったものと考えて差しつかえないだろう。又、登り窯式のものはおそらく大陸より渡来した新しい窯法であり、それと共に、須恵器という硬質な陶器が盛んに造られる様になららしい。さらに下って歴史時代になると灰釉陶器、磁器など現われる。一方文化的に又社会的に必要とされた各地の寺院の必需性から瓦が非常に多く使用される様になり、瓦窯も盛んに築かれる様になった。しかし地方に於ては瓦窯として特殊な窯を築き製造したと言うよりはむしろ前代の須恵器など焼いた登り窯を用いたことだろう。

しかばば須恵器など主に焼いた登り窯はどんなものであったかというと、先づその形式について見ると、形状などから五種類に分類される、即ち窯は大別し焚口、窓、煙出しの三部分より成っている。而して窓部は水平部、傾斜部から成りこの部分の相違から一段、二段、或いは階段式などに区別されている。これらの窯では窯底の傾斜部に焼くべきもの、即ち素形を置くのであるから傾斜部の広く長いものより能率的であったことはいう迄もない。且つ単に傾斜しているものより階段式の方がどれだけ多く安定し、多量に置けたかは想像に難くない。こんな点から窯の発展進歩を先ず一段式にて水平部の長いもの、水平部は短くより傾斜部の長いもの、さらに二段式のもの、階段式のものなどと一応考えられるが、すべてこの順に変化したとは限らない。

次に当然考えなくてはならない窯法、窯具などの問題がある。器物を焼くために、特に登り窯に於て必要なものは素形を先づ安定させるための支え台、焼き台（後のエンゴロ、ツク、駒の爪、目などと言われるもの）がな



注 1~4. 金井原 5~6. 善光屋敷
7~10. 如来寺 11. 前林 12. 堤洞
13~14. 開善寺

くてはならない。当時未だエンゴロ、ツク、駒の爪、目などの、今日有る窯具は無かったらしく、多く粘土、或いは既に焼かれた器物の破片などにより補われていたらしい。結局傾斜面に焼き台を置き、その上に焼くべき素形を倒れないように置く。そして水平部の出口である焚口に薪をくべ焼くのであるが、焚口を閉めた還元焰では灰褐色、黒灰色の須恵質のものが、焚口を開いての酸化焰では赤色、赤褐色のものが焼け、又松煙などのいぶし焼きにすると真黒くなるなど既に知られた事実である。燃料の薪として松が最も多く用いられたと思う。と言うのは、第一に樹量の多い事、第二に火炎の長いこと手近に繁茂したこと、現在瓦屋で好んで使用される事実から想像されるのである。

次に登り窯として最も重要な所在地形の立地条件に著しい特徴が有る。今迄いくつかの窯を調査し、又報告を見てその立地条件の主なものを取り上げて見ると、(1)需要地に近い(2)丘陵山陵の主として南或いは東斜面の傾斜地に設けられている(3)二方或いは三方丘地、山に囲まれた日だまり地形にある(4)附近に川、沼などがある(5)近くに粘土地帯がある。以上五つがその主なもので、(1)の条件は当然のものであって、供給、需要を控えて初めて成立する工業、特に初期工業にあっては尚さらの事である。(2)の条件は登り窯の構造上当然のもので、技術的に幼稚なる当時に於ては自然の傾斜地を利用するのが最も能率的であり、基盤の乾燥している南斜面が理想的である。又山陵に近いのは薪松を得るために、豊富であったためだろう。(3)の日向き地形は粘土をこね製作した素形を乾かす上に、又燃料の問題も含んでいる。(4)は言うまでもなく水を必要とするからであり、粘土を得るためにもある。(5)は欠くことの出来ない原料、粘土を得るためにある。

当金井原窯業場に於てもその一つ欠くもの無く、近くに寺あり、上野段丘の南斜面を利用し、段丘崖に接し、本沢に適当な水流を有し、粘土地帯も近くに存在し全て共通する条件を具備していたのである。しかしこれらの地形上の制約は各々築く人の窯業上の技術などにより多少違っていたかも知れない。

其二 次に参考までに多年朝鮮で瓦業を営まれ、現に当地で瓦を焼かれている人から聞いた朝鮮式の瓦窯を紹介しよう。

『朝鮮の瓦窯は唯煙出しの部分が二又になっているだけで金井原の窯のと、即ち登り窯と差して変化はなく、規模は長さ六~七米、幅二~三米、高さ一、八メートルで、傾斜面は三〇度位の勾配で焚口の部分より煙出しの部分に上っている。人の技術などの相違により或いは異なるが一窯一築、三昼夜位で千枚、或いはそれ以上に普通焼く。燃料は一般に松を用いる。これは割ったものでは火力が一度に出てしまい更に長く持たないという欠点がある。

「スキア」(丸瓦)、「アンキア」(平瓦)を作る場合、日本では「布目瓦」と布目の跡を残すものをさももったいなげに、もっともらしく呼んでいるが、布目のつくのはその製造過程の必要から生じたものであって、別に朝鮮では珍しくも何んでもなく、布目がつかなくては現に瓦が出来ない。即ち粘土を練り固め、図三に見るが如く橈状の円筒を作り、外側に布の混したのを巻きつけ、繩或いは藁を三方より垂らし、円筒の上へ一面に練った粘土をたたき付け形を整える。次にこれを半乾きにした頃、前に入れておいた繩、藁などを引き抜き、粘土の素形を剥がす、それで「スキア」の時は細い円筒を使い、「アンキア」の時は太い円筒を用いればよいわけですね…』



上表 下裏

また金井原窯址を見られて『三～四〇〇枚が普通で、五〇〇枚ぐらいが精一杯だったでしょう』とつけ加えられていた。結局朝鮮より伝えられたと言う窯が分家たる我が国の方が技術的に発展し、現在のものがあるのに対し、本家たる朝鮮に於て未だ千何百年かの昔と同じ方法に飽きず今なお持続されているのである。

其三 次にこの金井原窯を中心に、当代のこの地方の文化的背景について考えて見よう。布目瓦は当時に於て凡そ大寺院など有力な権力者の屋根瓦として主に使用されたと云われている。すると如何なるものがあったか、何時頃のものか、又その寺域は当時のそれらに匹敵する何物かを築き得る文化的、又は経済的基礎は出来ていたのだろうか、それらに匹敵する何物かを築き得る文化的、又は経済的基礎は出来ていたのだろうか、それらの問題について私考を述べようと思う。

今迄、日本の文化は七・八千年前に始まる縄文式時代よりも考えられていたが最近になり縄文期以前、即ちプレ縄文（所謂日本的新石器時代）文化の遺産と考えられる遺物が各地から発見され、その起源も何万年前に遡るとされる様になった。それはさて置いて、放浪から定着へ、狩猟から農耕へ、家族集団から氏族集団、更には地域集団へと、その土地に定着し、聚落を形成し、経済圏の許す限りの一文化圏を築き上げる様になったのは今から凡そ二千年前後と言われる弥生時代からであるといはれている。ここには計画的な生産技術の発展があり、新しい文化を作ることを通じて文化的地域性と地域の分立性が形成されながらも、それを超越した新しい心理的共通性を生ぜしめ、しかもその形成は著しい民族的な特殊性を持っていた。その所謂始りつつあった個性の発展、変動の早さは縄文式時代の日本人のこれまで味わったいすれの経験をものりこえるものであり、こうした事態の招来は如何なるものに原因するかは今更に説明する迄もないだろう。新たなる生産形態、新たなる利器の摂取は急速に勢い西日本より東日本へと展開し、この伊那谷へも弥生式中期文化として、凡そ千數百年前後に、入って来たものと思われる。それら具体的なことはさておき、当座光寺村に於ける弥生式遺跡について見ると、新井原、恒川の地帯に弥生中期後半の遺跡が分布し、彼等弥生式時代人は市場の南に続く湿地帯、或いは恒川の清水附近に水田地帯を設けたであろう。そして如何に地域文化を発展せしめたかは、後に続く古墳時代に於て一層具体化されている。即ち郡下有数の古墳が存在することにより、強く先行弥生式文化の発展を物語るものである。

言ふ迄もなく古墳は上流社会の生産物（？）とも言うべきものであり、多くの存在はより地方的に有力なる文化圏を意味し、且つ大なる中央文化吸収力を持っていたことを物語る。規模雄大なるを誇る前方後円墳高岡古墳、当地唯一の古墳時代、中期初頭と言われる大塚古墳、日本的に数の少ないと言ふ銀製垂飾付長鎖式耳飾を出土した畦地古墳を始めとする五〇余基の古墳の存在が如何に文化膨張を示すか説明する迄もない。又この地を遠く奈良の都から東北蝦夷の地に続く東山道が神坂峠を越え、この市場の地点を通り過ぎていたことも考えなければならない。和銅年間木曾路が開通したとは言え、鎌倉時代まで幹線道路であった東山道、これが、如何に中央文化をこの地に伝えたかは案外に我々の想像以上のものがあったろう。大陸より移入された中央仏教の布教は結果として各地の国分寺或いは地方豪族による寺院の盛んな建立となり、当地方に於ても寺院の建立できるだけの文化的、或いは経済的基盤を有するものがあったとの想も難くない。それにここに存在する金井原窯に於ける瓦製造から容易に推測し得ることである。即ち瓦の需要が寺院に限られたと



図IV 「アンキア」型砾

仮定される時、瓦の多少に限らず寺の存在（或いは豪族の存在）を物語るものである。しかる後に、当窯址以外で附近に瓦が散布した時、その地が寺址或いは別な窯の存在を示すものと言えるだろう。現在では元善光寺、善光屋敷から、布目瓦が発見されており古寺院址ではないかと推定させられる。又次の如くの記録が古文献に記載されている。即ち伊呂波字類抄中に「推古十年（A.D六〇三年）信濃人若麻績東人、模仏像於難波江、安之麻績郷宇沼邑、云々」とある。信濃に麻績と称する所が二ヶ所有り、一つは中信東筑摩郡の一番北にある麻績村、一つはこの伊那の座光寺村である。伊那の麻績は市村先生などの研究で今の市場を中心とした南に続く龍西松北の地帯であることが知られている。又宇沼の村は現在は騎村上郷村であるが、市場と同じく第四段丘崖に接した市場より南西に広がる地帯であり、現に飯沼と転音され存在する。更にこれらを具体化する如く三代実録中に貞觀八年（A.D八六〇年）三月二日、信濃國伊奈郡寂光寺、筑摩郡錦織寺、更級郡安養寺、埴科郡屋代寺、佐久郡妙楽寺並預定額云々とあり、寂光寺が転化し座光寺になったとは一応史家達の定説の様である。これらによって貞觀年間に既に寂光寺と呼ばれる寺院が存在し、同八年に定額寺、國家より俸給を下賜されていたのである。それと共に前に述べた二つの文献が時代的にあまりへだたりがなく、そこに何か関係があるようと思われる。即ち推古年間、善光が難波江より奉じて来た仏が宇沼の邑に安置されてから皇極天皇元年（A.D六四二年）芋井の里（現在の長野善光寺）に移される迄約四〇年間のうちにここに寺堂の建立がなされ、瓦が当然必要とされたに違いない。又貞觀八年の定額寺とこの寺院がなった時そうなるべき設備拡張が行なわれたかも知れない。とにかくこれらの前後に瓦の必要性が生じたのではなかろうか。しかばこの金井原窯の存在もその前後と考えざるを得ないのである。

其四 次に各地に於て発見報告されている瓦を基にし、当地発見の金井原、元善光寺、善光屋敷の布目瓦について考えて見ようと思う。

閑野貞氏などによりその基胎を形造られたわが国の瓦研究は次第に熟しつつあるが、是れ迄の古瓦研究は主に巴瓦、或いは唐草瓦などの文様に注がれ、時代の推定も之れらによりなされて來た。しかし本瓦葺きをその基とする古寺院の屋根瓦は量的に平瓦、丸瓦が巴瓦唐草瓦などを圧倒し、1人平瓦、丸瓦などを出土し、時代推定を最も具体化させる瓦当などが発見されないままに単なる布目瓦の出土とだけに終わり、なんら具体的な時代推定もなし得ず、葬られた多くの遺址の有ったことを聞く。しかし近年急テンポに転回した考古学の発展の結果、古瓦に対する從来の考え方より一步踏み出した布目に対する新考察がなされる様になり、石田茂作氏など中心にされた布目瓦時代の区分は古瓦に対する親しみを一層我々に覚えさせる様になった。

一体布目瓦は古いと一口に言われているが、厳密には何時代から存在したのだろうか。瓦一般論に従うと、飛鳥時代より始まり所謂寧楽時代と編年される白鳳時代、それに続き奈良、平安、藤原、鎌倉、室町、桃山時代に存在したとされている。しかば各時代に於て如何なる相違が布目の上に認められるだろうか。石田茂作氏による「布目瓦の時代判定」なる論文より布目の時代差についてそのあらましを紹介する。

「古瓦にある布目は飛鳥白鳳時代は細かく、奈良、平安初期のものは荒く、藤原、鎌倉時代のものは細かく、室町、桃山のものは更に細かい。我が飛鳥奈良時代の布には文献から下品の太布、上品である細布の二種類があった。飛鳥白鳳の瓦に細布を用い、奈良平安の瓦に太布を用いたと言うことになり、この所以を強いて考えるならば、需要の少なかった飛鳥白鳳時代には粘土も細かく、上品の細布を用い丁寧な方法により作られたが、奈良時代に瓦の需要が急激に増加し粘土も荒くなり軟い細布より、硬い丈夫な太布が用いられる様になった。又當時布の原料としては黄麻が用いられた。これは繊維硬ばく、細布を得るに不向きである。古代瓦の布目が糸太く、繊維強くさわればバサバサする様な感があり、且つ糸目の通のはその為であろうか。

処が藤原時代になると布目が又細かく、細布を用いられたことが窺われる。これは我が国布の歴史から、原料的に從来の黄麻の代わりに苧麻が多く用いられる様になった。この性質は纖維柔らかく且つ毛脚が長い。従って細糸を得るに便利で有り、又社会的に爛熟した当代の気性に即し細布が流行した結果ではなかろうか。結局当代の瓦に於ては纖維糸柔らかく、毛ば立ち糸目の屈曲していることなど、正に苧麻による布痕と考えられるのである。鎌倉時代に於ては大体藤原時代と大差ないが縦糸を細く、横糸を太くするが多い。室町時代になると布目細かく、糸も細いが、古瓦への印象淡く且上から笠で消したものが多い。これは瓦製造の技術的進歩と言うより、屋根瓦としての進歩が製造過程中の布目痕を消し取ったと考えるべきで、桃山時代に更に強く江戸時代に於て布目を全く消すのである。以上のような考察の上に各時代に於ける布目の性質をはっきり把握するならば、布目瓦にあって一応の時代は想定し得るものと考える。更に布目の反対側に存在する繩文、彫目文などは何の為かと言うに製作的には粘土を締め固めたのであるが、同時に瓦葺の技術上屋根瓦と土とを密着せしめるものであった。これらが何時頃に於て現れたか、現在では白鳳より鎌倉時代のものにあることが知られている。さすれば茲に於て前より局限された布目瓦の時代を想定する事が出来るのである。

以上の如くの観点の上に布目の性格を凝視すると。(1)布目細かく、糸細く、糸目が通れば飛鳥時代。(2)布目細かく、糸が細く、糸目が通り、繩文(彫目)があれば白鳳時代。(3)布目荒く、糸太く、硬く、糸目通り繩文有れば奈良平安時代。(4)糸目細かく、糸細く、纖維柔らかく、毛ば立ち糸目通らず繩文有れば藤原時代。(5)布目細かく、縦糸細く横糸太く、纖維柔らかく、毛ば立ち糸目通らず繩文有れば鎌倉時代。(6)布目細かく、糸細く、布目細く磨消しあり繩文なくば室町桃山時代。と一応の推測も可能である。

以上石田氏による瓦の判定法であるが、もとより布目だけで我々が區別しようとした時全く冒険と言わなければならぬが、これらを基とし先に述べた金井原窯址、元善光寺、善光屋敷出土の布目瓦について見ると、凡そ奈良平安時代に或いは下がるとしても鎌倉の頃に焼かれたものと思われる所以ある。又元善光寺出土重圓文系瓦当に対して適切なる判定をなし得ないでいるが、考古学講座(4)の関野貞氏論ずる處に同様重圓文を有する瓦当を寧楽時代初め、即ち大化革新頃二流以下の舍堂に用いられた如く述べられていることをつけたておく。

6 結 び

とりとめもなく、ぐたぐたと述べて来たが、さて本窯址について簡単に試論的ではあるが結論をまとめておこう。

- 一、布目瓦窯であったこと。
- 一、その構造は焚口、窓、煙出しを設けた登り窯であった。(現在では煙出しが欠き取られたものらしく存在しない)
- 一、この窯は貞觀八年定額寺とされた寂光寺、本田善光の伝説にある古寺院と共に密接な関係にあったのではないかと考えられる。
- 一、本址出土の布目瓦によって示される年代は奈良末平安初期に相当する。

などのことが言えると思う。いずれにせよ下伊那に於て瓦の窯発見も少なく、徹した研究もなされておらず不明瞭であり味気ない。郡下一円に見た古代瓦の特色、それに伴う文化的、社会的特殊性をも同時に究めるべきであるが未だ私の不十分なる知識がそれを許さない。機会あったらしかるべき後に報告しようと思っている。尚金井原窯址について残された不明な点について、今後の然るべき調査に於て一応明らかにすべく

念じて止まない。

(一九五三・六)

主なる参考文献

- | | |
|--------------------|--------|
| 考古学雑誌 三四〇六 「須恵窯址考」 | 石川 恒太郎 |
| " 三四〇十 「布目瓦の時代判定」 | 石田 茂作 |
| 考古学講座(4) 「瓦」 | 関野 貞 |
| 信濃資料叢書 | 信濃教育会 |

V 周辺における瓦出土地

1. 如来寺境内（飯田市座光寺）

金井原瓦窯址の南約100mの、本沢を挟んだ同レベルの段丘上から下段の段丘に至る傾斜面に天台宗の古刹、座光如来寺（通称元善光寺）があり、その境内からは古くより古瓦の出土することが知られていた。

第8図6・7は旧座光寺小学校に保管されていたもので、如来寺出土のラベルが貼られており、現在飯田市上郷考古博物館に収蔵している。丸瓦の凸面（表面）に平行叩き目を施したものである。

現在寺院との直結は難しいが、寺院境内からの出土であり、古代寺院の存在したことは十分に考えられる。また、金井原瓦窯と同様の傾斜地という立地条件から瓦窯址の存在も考えられる。

2. 古瀬平遺跡（飯田市座光寺）

金井原瓦窯址から南東へ240mの、段丘崖下、本瓦窯址との比高差30mの位置に古瀬平遺跡がある。段丘崖下の湧水地を控えた弥生時代以降の集落址で、土師器・須恵器に混じって布目瓦も出土している。

出土瓦は、平瓦凸面（裏面）に青海波文の叩き目が施されたものである。

この地は、善光寺縁起による本田善光の誕生の地とされ、如来寺には善光寺仏を仮安置したとされる座光の臼等も伝えられている。

この地についても、前述の如来寺境内同様に、寺院址もしくは瓦窯址のいずれかであろうと推測されている。

3. 石行遺跡（飯田市座光寺）

金井原瓦窯址の北東約700mの高岡。新井原古墳群中に石行遺跡がある。本瓦窯址からは一段下位の段丘面上にあり、先記の古瀬平遺跡は連続する同一の段丘上にある。長野県飯田工業高校の建設に先立つ発掘調査により布目瓦が出土している。後述する高森町古瀬遺跡と金井原瓦窯址とのほぼ中間に位置する。

第8図5の、平瓦凸面に青海波文の叩き目を施した丁寧な作りの瓦が出土している。

4. 古瀬（道寿）遺跡（下伊那郡高森町下市田）

飯田市教育委員会による金井原瓦窯址の調査と相前後して、高森町教育委員会により発掘調査の実施された遺跡で、奈良時代の堅穴住居址2軒が検出された。その内一軒の住居址のカマドは、その芯材として瓦が用いられている。金井原瓦窯址からは北東に約1,500m隔てた位置にある。

出土した瓦は、金井原の工房址出土の軒丸瓦と同范と考えられる。焼け歪みの大きな丸瓦と特異な形態をなす平瓦の存在から、瓦工人に係る住居址ではないかとの指摘もある。

出土瓦の内容から、金井原瓦窯址とは極めて強い係りのある遺跡といえる。

5. その 他

上記以外にも具体的な内容の掌握ができていない、断片的な瓦出土が飯田市座光寺地区内の何か所かにある。

金井原瓦窯址の同一段丘面である上野台地の東端部の一画からも、かつて布目瓦の出土したことが口伝され、それはかなりの量であったらしく、別の瓦窯址の存在が考えられている。

又、金井原瓦窯址下位の低位段丘面上の一帯は、古代伊那郡衙址が存在した恒川遺跡群が展開しており、その何か所から、わずかではあるが布目瓦片が出土している。今後の調査の進展に伴い、瓦葺の古代伊那郡衙址に関連する建物の発見される可能性もある。

VI まとめ

今回の調査経過・結果は以上のとおり、瓦窯址については昭和28年の宮澤恒之氏による調査結果・考察による年代比定など異なる点は見出せない。今回の調査結果に基づき金井原瓦窯址周辺をとりまく状況を整理すると以下のとおりである。

調査個所の地形は、南西向きの斜面で、瓦窯址は傾斜の端部附近に構築され、そこからさらに急傾斜となり約10m下を本沢が流下する。本沢は現在も浸食を続けて高さ5m前後の崖となっており、本来ならば灰原の位置と推定される場所は河川敷きとなる。崖の頭から瓦窯址までの間は市道と宅地であるが、その造成時に布目瓦の出土の記録はない。

本瓦窯址は、半地下無段式窯窓であり、焼成部窓壁にスサ入りの粘土中に瓦を入れて構築している。

瓦を入れることにより、壁の強化を意図したものと考えられる。又、その瓦は壁材としたものと工房址出土のものとが同一の軒平瓦であることから本窯で製作した瓦を使用したといえる。

瓦窯址の北東側の30~40mの地点に、斜面を平らに掘り込んで作られた2か所の工房址がある。

工房址1は、カマドと床面の一部を確認したのみであるが、カマドの存在から居住的な性格の強い施設であり、工人が本窯の操業時には起居の場とすると共に、室内作業場として機能したものと推測される。

工房址2は、カマド・柱穴等の確認は出来ず、方形の竪穴のみの確認であり上屋の存否についての判断は出来ない。工房址1とは性格が異なり、専ら瓦を作る場所であったことが想定される。

それぞれの時期については、窯址内壁材の瓦と工房址2から出土した瓦とに同一文様の軒平瓦があり同時期の施設であったと判断される。

又、瓦窯址及び工房址は一定の間隔があり、それらの周囲に瓦の乾燥場等の存在も推定されたが、今次調査では具体的に把握することはできなかつたが、南西する小傾斜地の一画を活用して製瓦作業から焼成作業まで一連の瓦生産が営まれた様を読み取ることのできる遺跡といえる。

次に出土瓦について見ると、当方での既出資料の中には、今回の出土品と共通する軒丸瓦の瓦当文様はなくその類例は他地域に求めざるを得ない。

それは、単純な文様の比較によれば、愛知県岡崎市の北野廃寺を始めとする三河地方出土の瓦との強い共通性が見られ、本例も所謂西三河の北野系の瓦とすることが許されるといえる。

非常に簡略化された六弁の蓮華文と大粒の蓮子で構成される内区文様は、北野第一類C形式に近似する。ただ、北野例と比べて蓮華文そのものの形骸化は著しく、同一系統とすればより後出的な姿と判断できる。

外区については西三河の例に比べると、高く直立する縁部の状況は共通するが、重圓文が不明瞭であり、外区の内縁と外縁とを分離する痕跡程度の沈線が認められる二重圓文となる。この点からも北野例に比べ後出的な様相を示すといえる。

また、中房部は欠落して確認できるものはないが、本文中に記した高森町下市田の古窯遺跡出土例によれば、中心部に大粒の蓮子を配する点で北野例と共通するものと判断される。

次に軒平瓦をみると、三重弧文およびそれと同一工具による連続刺突（簾状）文とがあり、重弧文は北野

例との共通性も認められる。一方、連続刺突文は2条のみで重弧文と同一の工具を用いたものである。東三河の寺領廃寺・伊知多神社遺跡・医王寺跡などにみられる型押簾条文との関連も考えられる。また、製瓦技法については詳細な検討をなし得ていないが、模骨使用の紐巻き作りの可能性が強く、技法的には北野例の粘土板桶巻き作りとは異なる様相がある。

以上のように、軒丸瓦文様の比較によれば、西三河北野系の影響を強く受けていることは間違いない。一方、軒平瓦は東三河各地の出土例との関連を考えざるを得ない状況があり、製瓦技法も北野系のそれとは異なる可能性が高い。結局、東西三河のそれぞれの資料と部分部分での共通点はあるが、それがこの飯田の地にいかにてもたらされたのか、又、その流入経路を現段階で立証することは極めて困難といえる。

時代的に見ても、西三河の北野廃寺の創建時期とされる白鳳時代前期からはかなり後出的であり、工房址より出土した須恵器及び当地方で唯一の類例資料を出土した高森町古瀬遺跡の伴出須恵器の製作年代が8世紀第2四半期頃と判断されることにより、1世紀ないし半世紀の時間差を考慮しての検討が必要といえる。

統いて、本瓦窯址一帯で生産された瓦の消費地について若干の整理をすれば以下の通りである。

金井原瓦窯は、窯壁材として用いられた瓦や工房址からの出土瓦の内容等から複数回の操業が考えられ、周辺に未確認の瓦窯の存在も考えられることも合わせ、全体での瓦生産量は相当のものであったと推測される。さらに、その生産量に見合った瓦の使用先は、相当規模の建物の屋根を葺いたものと考えられる。

現実には、周辺地帯での瓦出土状況からは、具体的な寺院址の特定は困難な現状にある。しかし、三代実録にみられる定額寺「寂光寺」は、伊那郡内に所在し、それは伊那郡衙の置かれた麻績郷内に、それも郡衙からあまり距離を置かない地にあった可能性が極めて高いといえる。とすれば、金井原瓦窯で生産された瓦は、伊那郡衙と強く関わったであろう「寂光寺」の伽藍を葺いた瓦とすることも十分に考えられることである。ちなみに、古代伊那郡衙址の位置は、金井原瓦窯址からは南東方向へ約500mを隔てた恒川遺跡群内の高岡地籍に存在したことが確認されつつあり、その近在に郡衙と関連した古代寺院の存在も推測されるわけである。

なお、現在金井原瓦窯址の近在での瓦出土地は、生産地である瓦窯址と消費地である寺院址のいずれをも視野において考究すべき状況であり、仮りに寺院址の存在を予測できる範囲を想定すると、概ね下伊那郡高森町下市田から南大島川を挟んで連続する飯田市座光寺の低位段丘面上の南北3kmのうちに求めうるといえる。

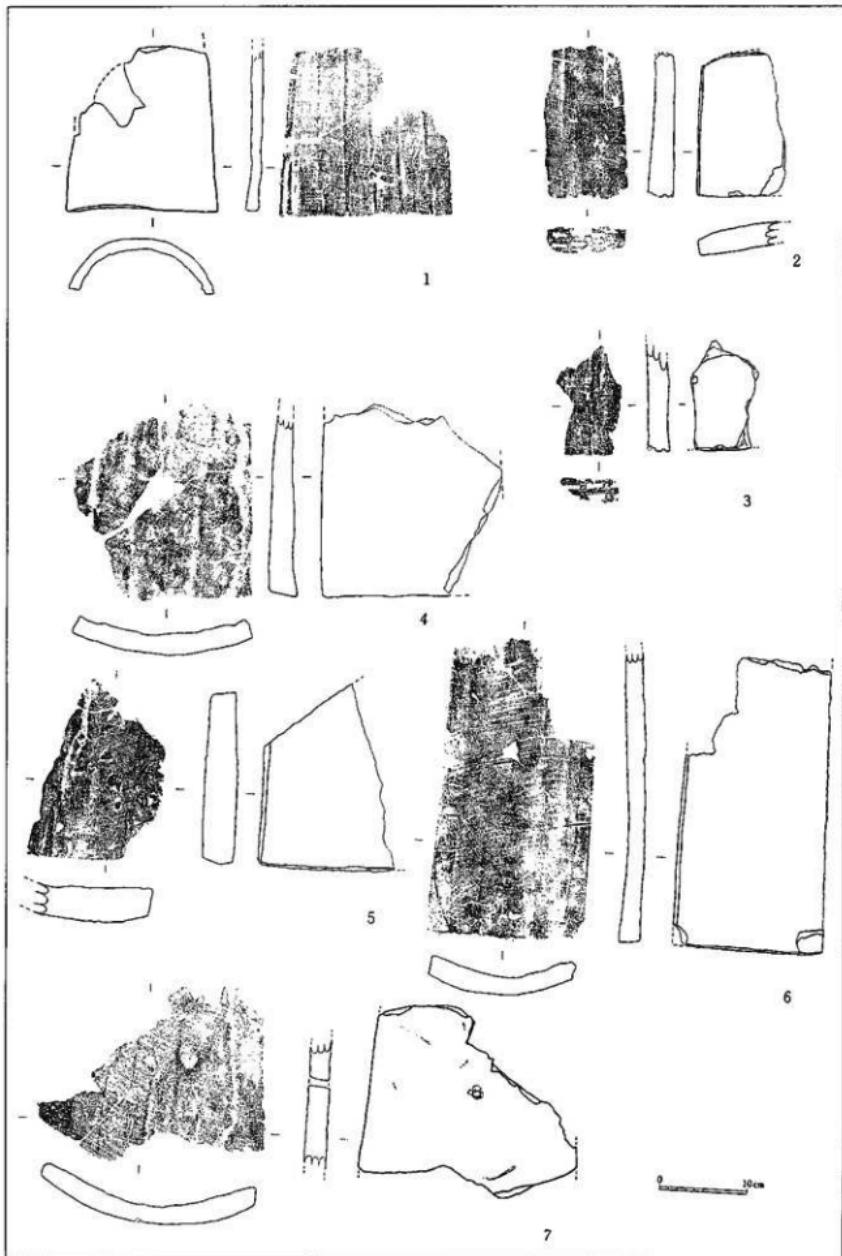
しかし、その具体的な場所の特定が困難なことは先述のとおりであり、実態の解明は今後の調査に待つよりその術は無いといえる。そして、近年の諸開発の進展は、この一帯でも例外ではなく、それらに対応する地道な埋蔵文化財の保護活動の中で新しい事実の確認がなされることが不可欠といえる。その結果として具体的な寺院址の存在が明確化され、それがこの地での古代史解明に大きく寄与することは言を待たないといえる。

又、将来における寺院址（瓦消費地）の確認がなされることによって、今回の開発に伴い消滅した金井原瓦窯址と工房址という、瓦生産に関わったこの遺跡そのものの存在がクローズアップされると共に歴史上での正しい理解がなしうるといえる。

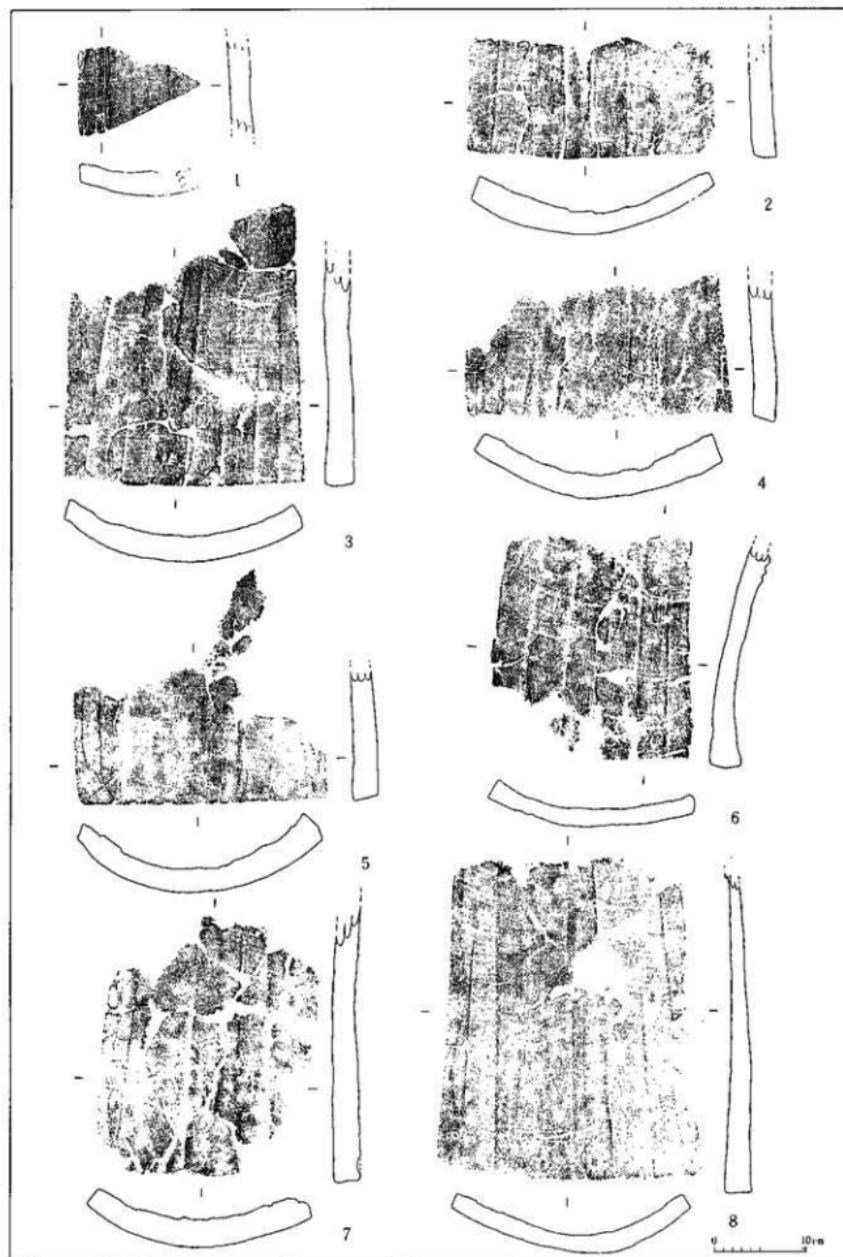
《参考文献》

- | | | |
|------|----------|--------------------------|
| 1953 | 宮澤恒之 | 『伊那』1953 12月号 1954 2・3月号 |
| 1961 | 市村咸人 | 『下伊那史』第4巻 |
| 1994 | 高森町教育委員会 | ブロック会議資料 |
| 1982 | 岡崎市教育委員会 | 『真福寺東谷遺跡』 |
| 1991 | " | 「国指定史跡『北野庵寺』」 |

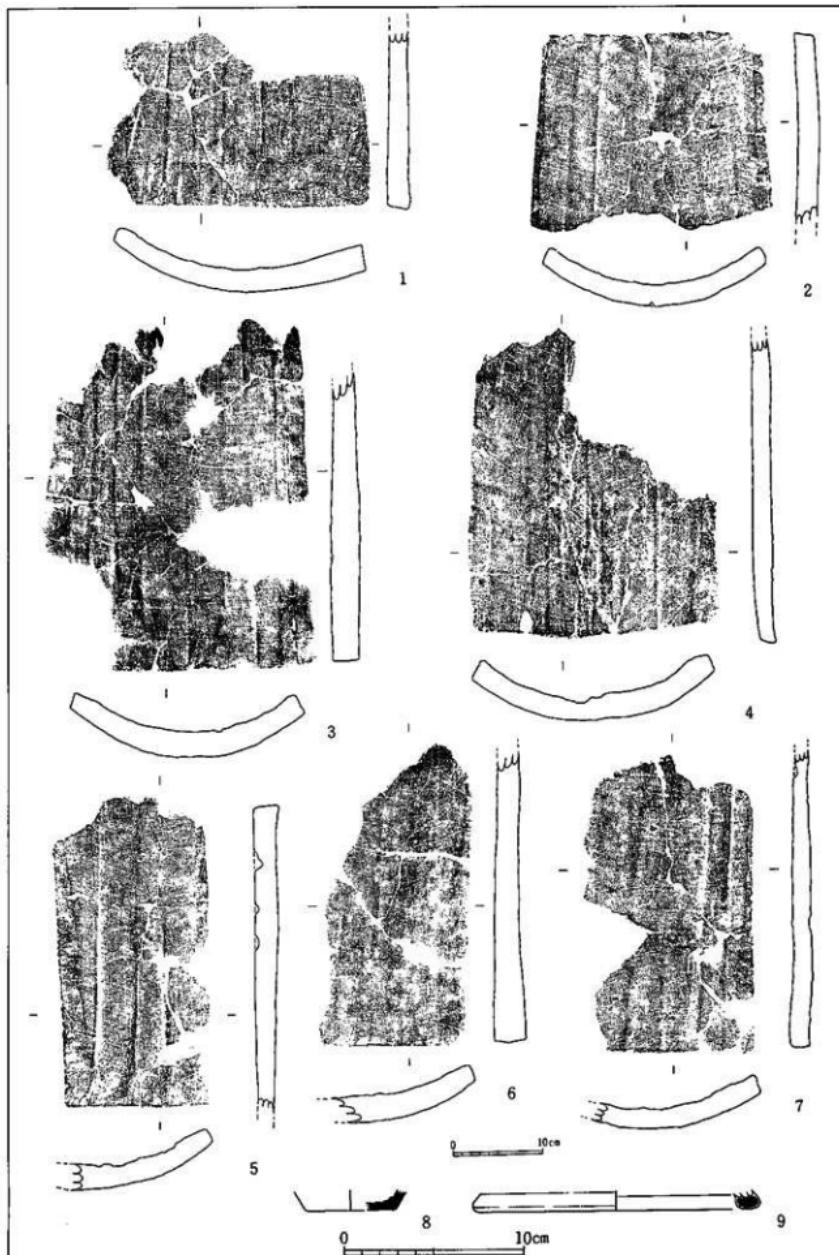
図版



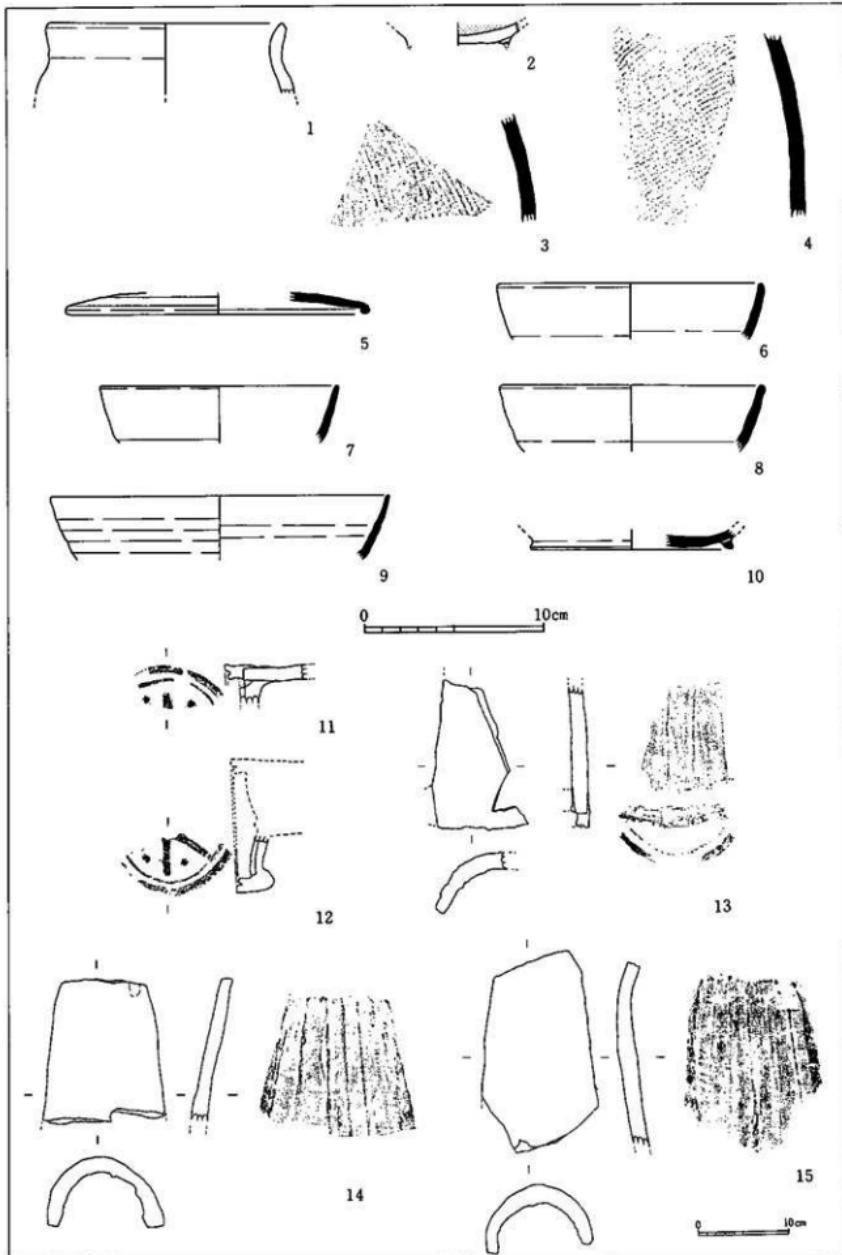
第1図 瓦窯址1 出土遺物



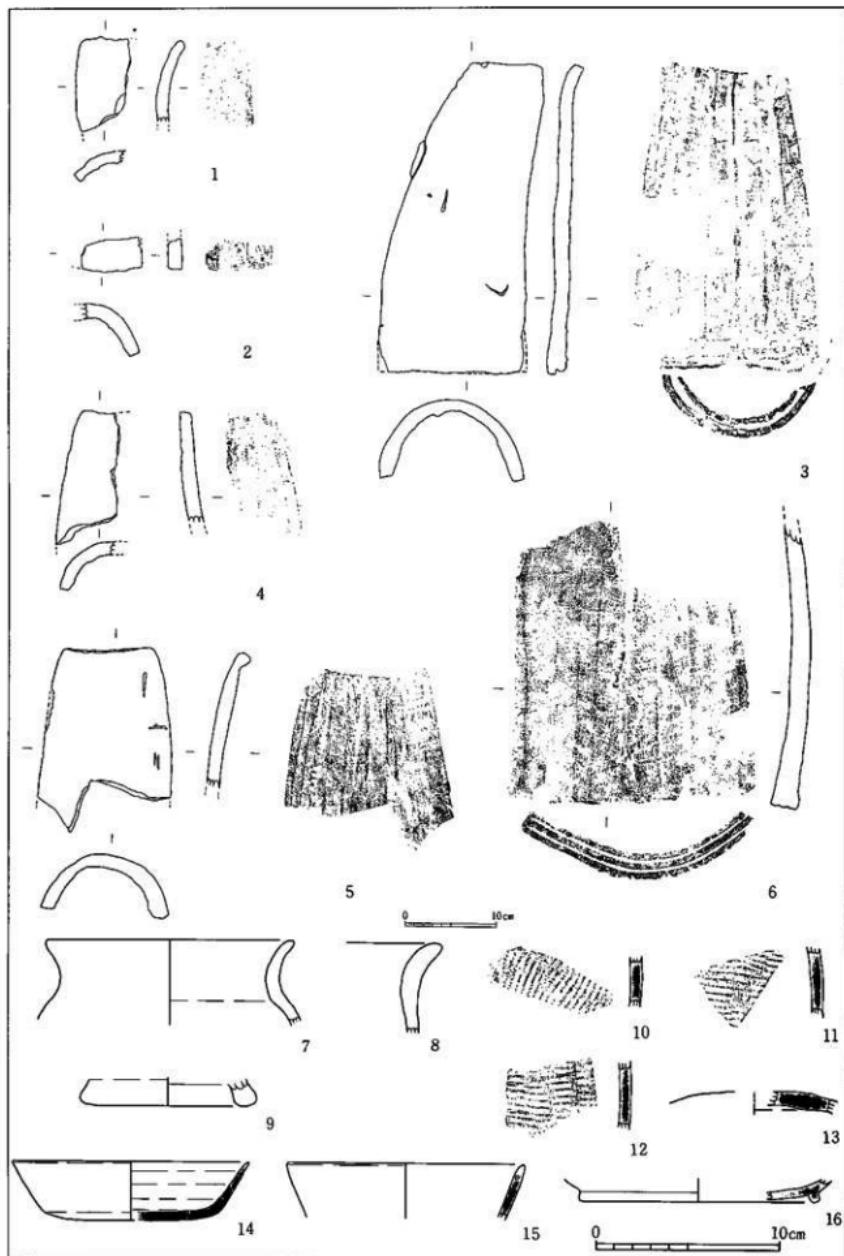
第2図 瓦窯址1 出土遺物



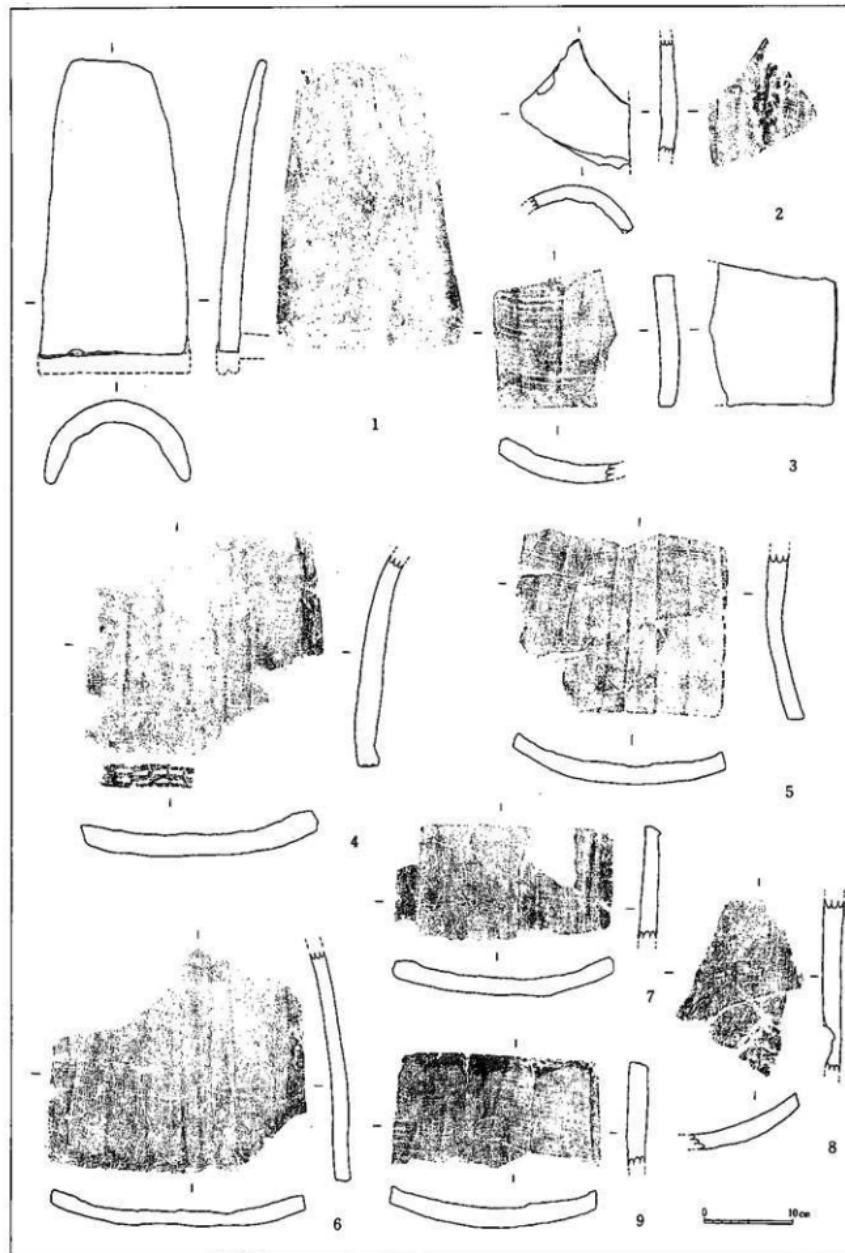
第3図 瓦窯址1 出土遺物



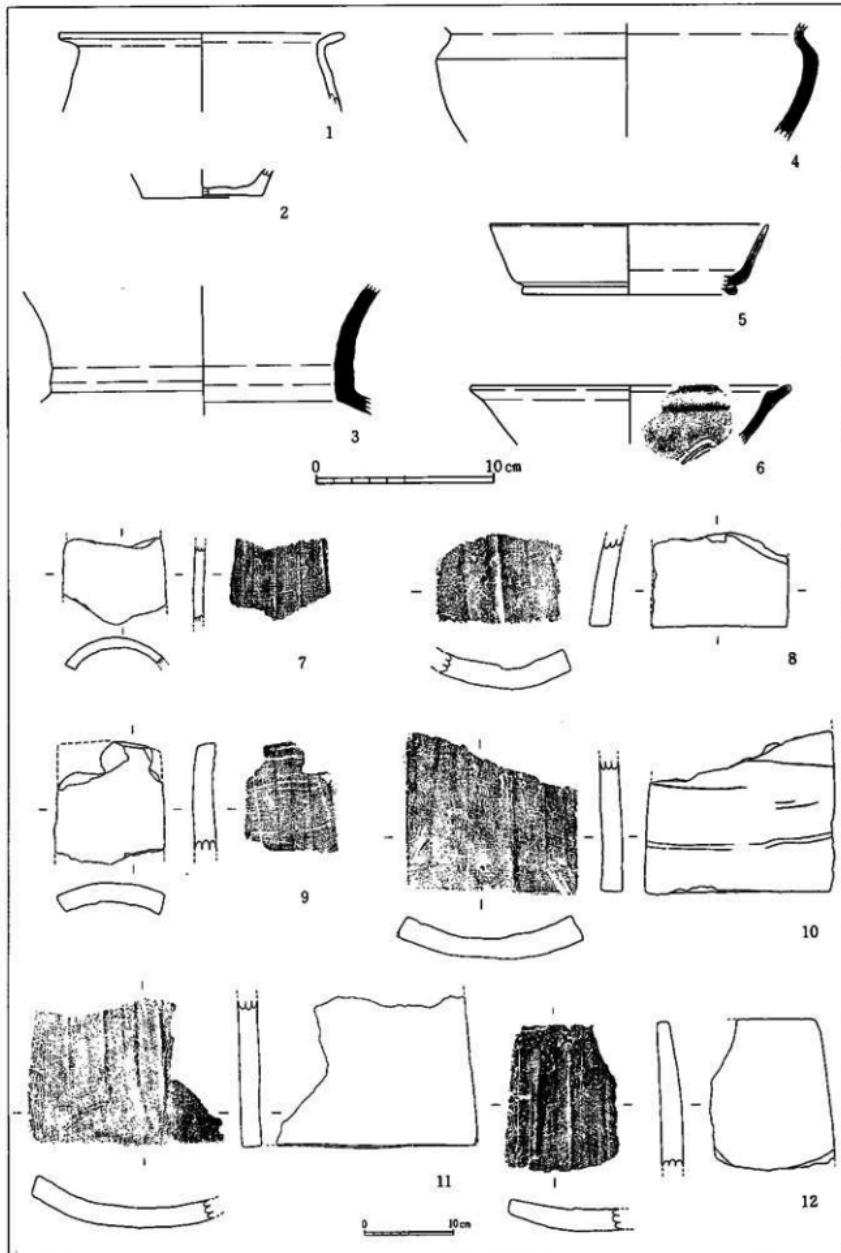
第4図 工房址1 出土遺物



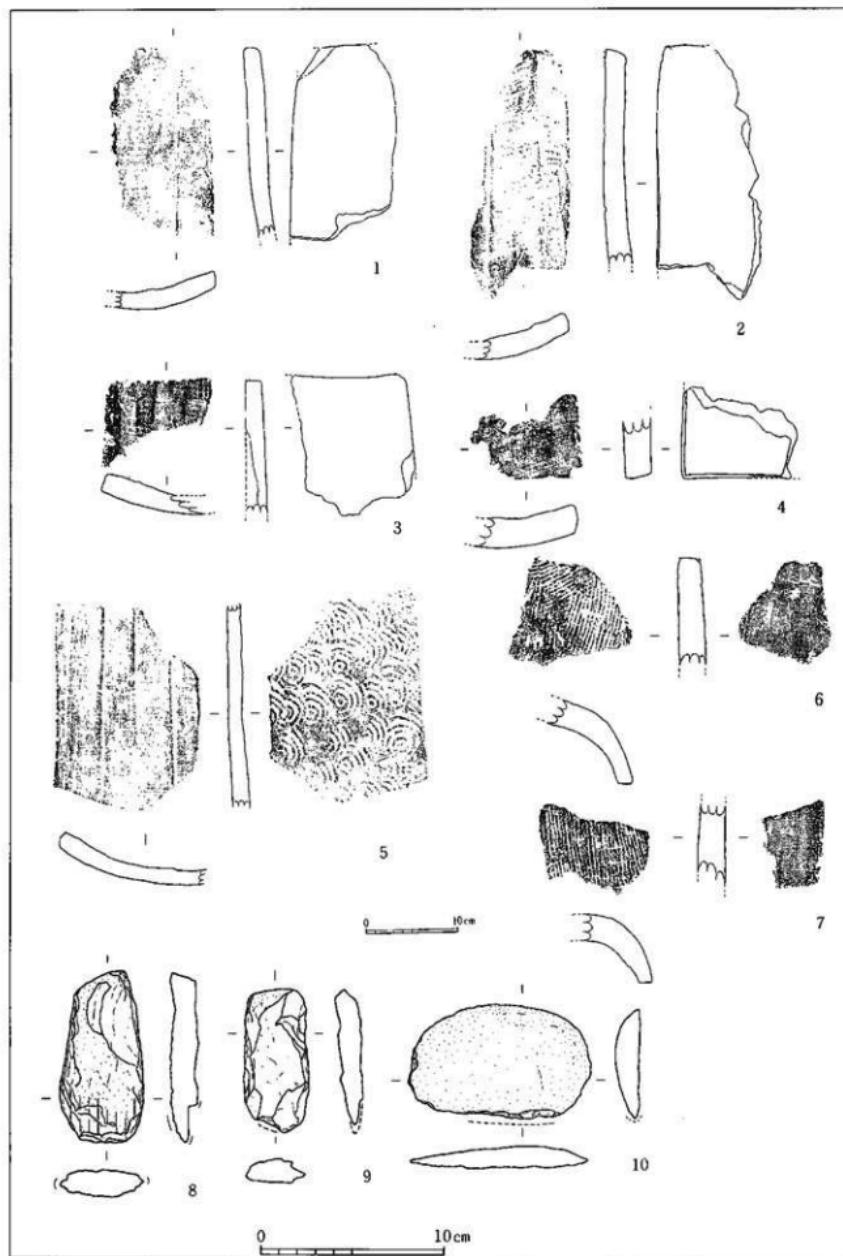
第5図 工房址1(1~6)・工房址2(7~16) 出土遺物



第6図 工房址2 出土遺物



第7図 造構外(1~7)・昭和28年調査(8~12) 出土遺物



第8図 昭和28年(1~4)・石行遺跡(5)・如来寺境内(6~7)・造構外(8~10) 出土遺物

写 真 図 版



金井原瓦窯址 1 調査前(西から)



同 上 (東南から)

瓦窯址 1 全体



同上 底・壁瓦出土状態



工房址 1 全 体



同 上 瓦当出土状態(北東から)



工房址 1 カマド



同上断面



工房址 2 全 体



同 上 遺物分布状态



工房址 2 土層断面



調査区全体



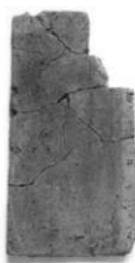
瓦窯址 1 出土瓦(表)



同上(裏)



瓦窯址 1 出土役物瓦(表)



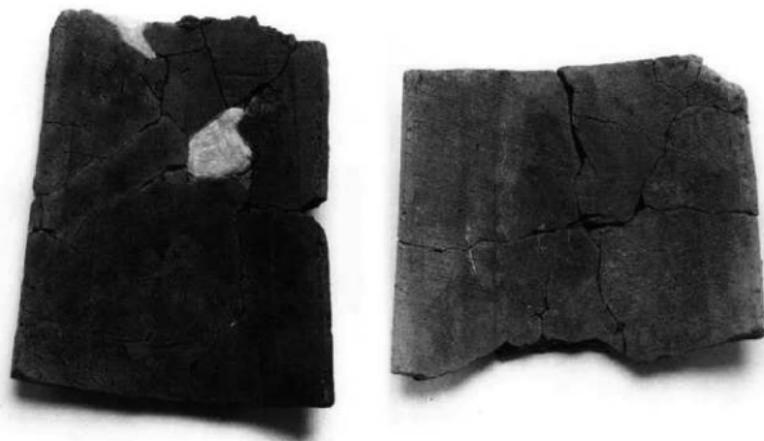
同 左 (裏)



同 上 拡 大



瓦窑址 1 出土平瓦



同上 拓大



瓦窯址 1 出土須恵器



工房址 1 出土軒丸瓦



同左図の右 拡 大



同 上 裏

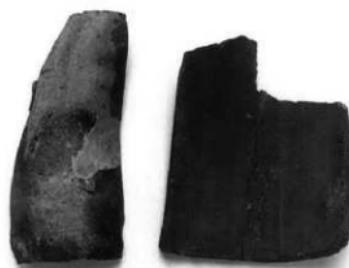


同上図の左 内 側

工房址 1 出土軒先丸・平瓦



同上表

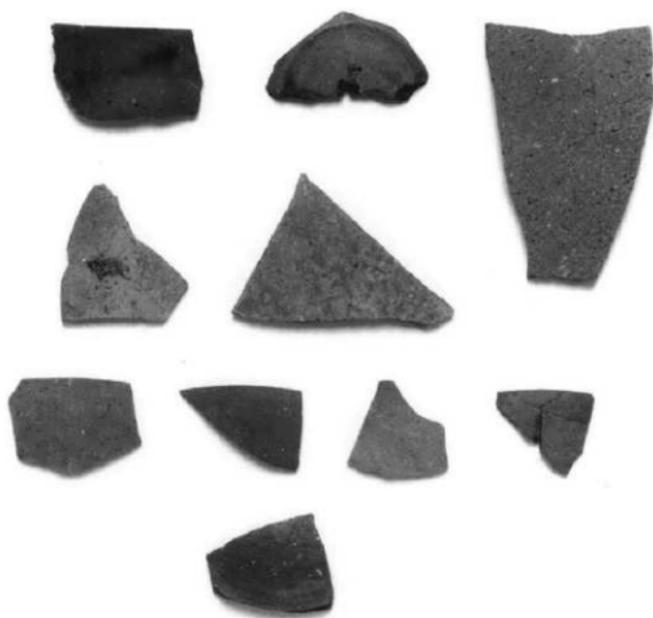


同上裏





工房址 1 出土丸瓦



工房址 1 出 土 土師器・須恵器



工房址2 出土瓦(表)

同 左 (裏)



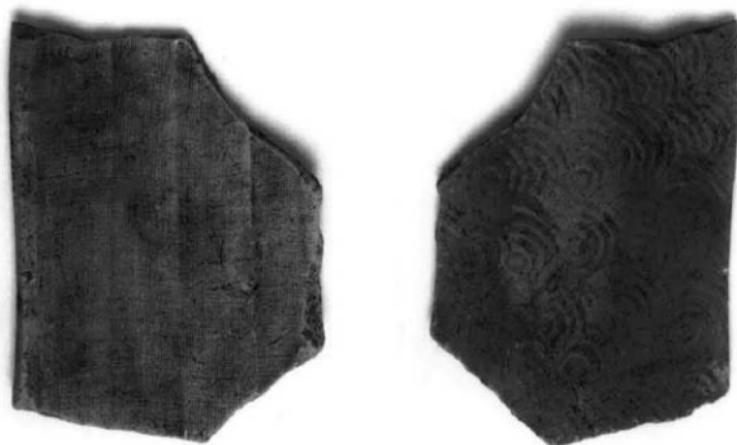
同 上 拡 大



工房址 2 出土 土師器・須恵器



昭和28年 発掘調査出土瓦



石行遺跡 出土瓦



(表) 如来寺出土丸瓦 (裏)



瓦窯址 1 調査スナップ



同上 指導



工房址1 調査スナップ



報告書抄録

ふりがな	うえの いせき かないばらがようし						
書名	上野遺跡・金井原瓦窯址						
副書名	座光寺配水池建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小林正春・佐々木嘉和						
編集機関	飯田市教育委員会						
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 0265-53-4545						
発行年月日	1996年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド 市町村 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
うえの 上野	いいだし せいこうじ 飯田市座光寺 上野		35°48' 20"	137°51' 40"	1994年 4月11日～ 5月31日	1,400m ²	配水池 建設
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
上 野	瓦窯址工房址	奈 良	瓦窯址1基 工房址2棟	布 目 瓦			

座光寺配水池建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

上野遺跡・金井原瓦窯址

1996年3月 印刷・発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145
飯田市教育委員会
印 刷 龍共印刷株式会社

